改教時報

第百六號

明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十六年十一月八日發行（每月一回八日發行）

政教時報第百六號目次

論說

◎宗教的經營及び社會事業を論ず　文學士　有馬祐政

◎『新論』を讀む　《社說》

社會

◎獨逸勞働組合法の發達　池山榮吉

◎未成年に對する犯罪豫防の手段　▲自然教訓　千野哲次　小河滋次郎

信界

◎靜觀錄　文學士　近角常觀

雜錄

◎元照律師の西方願生　齋藤唯信

◎因敬生信　百目木劍虹

◎錫蘭佛跡　文學博士　松本文三郎

◎支那の骨相說と刑事人類學　本多澄雲

文苑

◎雜吟　句佛

◎秋の句（吟二、曉村、生巢、麻郷）　雲低里人

◎燈影微吟　岡しげる

◎雪と海　菊池耕雲

◎漢詩　藤井無絃

▲新刊紹介▼

報道

◎報道一束　《政教子》

◎獨逸より　醫學士　久保猪之吉

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。

二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。

三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。

四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。

五、公認教制度を調査する事。

六、社會問題を調究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。

七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。

八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。

九、教會の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。

十、社會に於ける一切の迷信を勵絕する事。

十一、殖民傳道を奬勵する事。

十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光發せしむる筐を講する事。

政教時報　第百六號　十一月八日發行

宗教的經營及び社會事業を論ず

大聖釋尊。猶カピラヴスツの太子たりし時、絕大の求道心を起し、生老病死の大問題を解決せむと欲し。夜に乘じて王宮を遁れ、駿馬に跨りて將に迦毘羅城門を踰へむとするや。第六天の魔王之を要して諫めて曰く。汝七日の後轉輪大王として、全印度に君臨せむとす、請ふ止れ、復往く勿れと。太子毅然として宣言して曰く、此の如き千億の名譽も我に對して今日何等の誘惑力を有せずと、天下王國の捧物を退くること恰も口より唾を捨つるが如し。忽然として一個の乞食者となり。路にマカヅハ國を過ぎむとするや、ビンバサラ王見て大に驚きて曰。我王舍城を首府として都邑八萬、人口十八吉羅を有す。マカダ、アンヌの兩國廣袤四千八百哩、地豐かにして民富む、冀くは卿と共に之を分ち領せむかなと。太子辭して曰く。我地上の王國を欲せず、我求むる所は大覺者たらむと欲する耳と。ビンバサラ王乃ち請ふて曰く、太子若し覺者に達し道を弘むるに至らは、先づ王舍城に來りて我が爲めに法を說き玉へと、固く約して別る。爾後六年、太子は遂に成道し玉ひ、ベナレスに五比丘を度し、ウルベラに三迦葉を化し、遊行して遂に王舍城に入り玉ふや、ビンバサラ王喜ひ迎へて人民と共に法を聽き、忽ち法淨眼を得、嘆じて曰く。我太子たりし時、五種の願望を有したりき。我王位に登らむと欲する其一也。神聖絕對の大覺者の我王國に來らむと欲する其二也。我彼に對して恭敬尊重せむと欲する其三也。彼、我か爲めに大法を宣說せむことを欲する其四也。我之を聽きて領解し、大悟せむと欲する其五也。而して今や全く此願望を滿足するを得たりと、謹て王宮に迎へて之を供養す。王乃ち以爲らく。冀くは一良地を卜して佛を請せむかな、其地たるや、都を去る遠きに過ぐべからず、又近きに過ぐべからず、衆人の容易に來り見ゆべき所にして、晝、雜沓せず、夜喧噪ならず、靜閑、以て道を求むるに適せざるべからずと。乃ち王其樂園たる竹園を卜し、金瓶に盛るに淸水を以てし、謹んて佛の手に注ぎ、捧げて曰く。我佛を以て首長として佛弟子敎團の爲めに此竹園を喜捨し奉る、唯願くは哀愍して納受し玉へと、乃ち世尊默然として之を受け玉ふ。而して偈頌を說きて、王を勵まし且つ安慰を與へて曰く。

若し人能く布施すれば、
若し人能く忍辱すれば、
若し人能く善を造れば、
能く此三行を具すれば、
若し貧窮の人ありて、
他の施を修するを見る時、
隨喜するの福報は、

慳貪を斷除し。
永く瞋恚を離れ。
愚痴に遠ざかる。
速かに般涅槃に至る。
財の布施すべき無くむば、
隨喜の心を生ぜよ。
施等と異ることなし。

是實に佛教に於ける。僧伽藍の權輿也。宗教的經營の模範なり、吾人其意味の深長なるを味はずむばあるべからず。

嗚呼、佛陀は俗的の王國を捨てゝ正義の王國を建設し玉へり、眞理の王國を開闢し玉へり。ベナレスの説法既に之を明言し玉ひたるにあらずや。既に佛自ら萬乘の貴を捨てゝ精神的の教團を形作り玉ふ。佛の眼中財物なく、富貴なし。而して猶富貴の人をして慈善布施を勸め王ふ所以のもの、寧ろ吾人同胞をして互に相助け相救ふの德を養はしめ玉ふにあらずや、ベナレスの富豪なる青年、ヤシャなるもの煩悶に堪へず、夜に乘じて家に遁れ、佛に詣でゝ道を求む。佛先づ説くに慈善布施の功德を説き、而して安心の道を説き玉ふ。ヤシャの父追て至る、佛亦説くに慈善布施の功德を説きて道に入らしめ玉ふ、遂にヤシャの母及妻を感化し、四人の親友を感化し五十人の同業商人を感化し玉ふ。而して佛は此の如く慈善を勸め玉ふ所以のもの、其投ずるの財物其者を主とし玉ふにあらず、之を投ずるの精神的慈愛を要とし玉ふにあらずや。若し單に財を施し貨を散するを以て其目的となさば、太子自ら其財を散し、又ビンバサラ王國の一半を受けて之を衆に散ずるも可也。佛陀は實に布施慈善の行能く慳吝貪慾の煩惱を滅すを賞し玉ふ。若し俗的受授を以て人に與へむとせば、ビンバサラの王國を傾くるも不可也。若し內心解脫の結果によりて眞正の喜捨をなさば、一竹園の地猶以て優に佛陀及ひ佛弟子を供養するに足れり。財の多少にあらず、精神の如何に關するなり。若し貧窮の人ありて財の布施すべきなさの時、他の布施慈善に對して滿心隨喜の念を生せば、喜捨の人と異るなしと云ふ。豈高崇なる説法にあらずや。獨り布施のみ此の如くならむや。人若し他の怒に對して能く忍ばむか。他を怨するが爲めに善なるにあらず、却て是れ自己か怒を滅すが爲めに善なる也。人若し他に對して善行をなす、他を利するが爲めに善なるにあらず、却て是れ自己が愚昧を滅するが爲めに善なる也。此の如き精神的修養の有形上に實現し來りたるもの、是れ佛陀の教團にして實に彼の正義の王國なる者、即宗教的經營の模範なりと謂ふべし。

* * * *

我國聖德太子の政を攝し玉ふや、恐くは釋尊を以て理想とし玉ひしなるべし。而して政治上に社會上に着々として、偉大なる宗教的經營の實現せられたるを見る。法隆寺の建立は

當時の信仰を有形に實現したるものにして、四天王寺即悲田、療病、施藥、敬田四院の設立は、佛陀の精神を社會事業にあらはせるもの。爾來歷朝益々此國是に則り、施設經營至らざる所なし。聖武天皇の朝實に其極に達せり。而して天平十五年十月十五日帝發願し玉ひ、東大年廬舍那佛金銅の大像を造りて、以て華嚴海印三昧中の境界を實現し、天下百姓と同く利益を蒙り、共に菩提を致さむことを願ひ玉ふ。而して經營の方法を見るに、頗る宗教的眞精神の發露せるに感せずむばあらず。其詔に曰く。夫、天下の富を有つ者は朕也。天下の勢を有つ者は朕也。此富と勢とを以てせば功を成すこと難きに非ず。惟恐る民を勞して、能く感望せしむることなきを、故に豫め知識する者は、各介福を求めよ、宜しく毎日三拜して、中心誠を存して、以て此像を造る可し。若し人ありて一枝の草、一把の土を持して助け作さむと願ふ者は之を聽さむ。國郡等の司、因緣收斂して、百姓を侵擾すること勿れ、遐邇に布告して、朕が意を知らしむと。良辨僧正之が勸進となりて諸國に募緣し。行基菩薩伊勢の大廟に詣して禱る。何ぞ其經營の肅々として自ら謹むことの切實なるや。

此の如く聖武天皇が國分寺を諸國に作り、中央に東大寺を起す、皆皇后光明子の勸發する所也。而して啻に此の如き建築經營の事のみならず、慈善的社會的の事業に於て意を用ゆる最も切也。悲田、施藥の二院を置き、天下の餓莩を恤まれたり、殊に最も吾人をして感嘆措く能はざらしむる所のものは、皇后が施設に成るところの癩病院也。吾人は之に關して世に傳ふる所の傳記頗る宗教的趣味の存するを感ぜずむばあらず。曰く。東大寺成るの時、后心中に以爲らく。大像の大殿、皆既に備る。帝は外に勗め、我は內に營む、勝功鉅德加ふべからざる也と。聊か誇るの意あり。一夕閤裏空中聲ありて曰く。后誇る莫れ、妙觸宣明、浴室澣濯、其功言ふべからざる而已と。后怪み且つ喜びて溫室を建て貴賤をして浴を取らしむ。后又誓て曰く、我親しく千人の垢を去らむと、君臣之を憚るも后の壯志沮むべからざる也、遂に九百九十九人を竟る。最後に一人あり、全身疥癩甚だしくして、臭氣室に滿つ。后垢を去り難し、又自ら思ふ。今千の數に滿たんとす、豈之を避くべけむやと、忍びて背を揩ふ。病人言く。我惡病を受けて此瘡を患ふること久し、適良醫あり敎へて曰く。人をして膿を吸はしむれば必ず癒ゆると得むと、而して世上深く悲むものなし、故に我沈痼實に此に至る。今后無遮の悲濟を行ひ玉ふ、孔だ貴し、願くば后我を憐むの意なきかと。后已むを得ずして瘡を吸ひ膿を吐き、頂より踵に至る皆遍し。后病人に語りて曰く、我汝が瘡を吸ひしことを人に語ることなかれと。時に病人大光明を放ちて告て曰く。后は阿閦佛の垢を去れり、又愼て人に語ること勿れと。后驚て之を視る、妙相端嚴、光耀覆郁、忽然として見へず、后驚喜すること無量也。

其地に就きて伽藍を構へ、阿閃寺と號すと。實に是れ現時南部に遺跡を存する十八間長屋即癩病院の始也。

吾人は此說話より、幾多の宗教的訓戒の潛めるものを見出すもの也。聖武帝を助けて東大寺の大經營を爲す、必ずや此の如き自ら抑損すべき佛勅を感ずべきの時、后が空中の聲を聞く豈意味なしとせむや。且夫れ慈善の事、單に人を利するが爲めに善なるにあらず、自ら行ふが爲めに善なるのみ。萬乘の尊と雖、自ら其手を下すにあらずむば、眞個の慈善の意義に協ふものにあらざる也。最後の癩病患者が來りて后に求むる所の者、實に是佛陀か皇后に對する偉大なる試にあらずや。而して后善く其請を容れて、己を捨て絕大なる慈惠を垂れ玉ふ。嗚呼后は是れは哀々たる佛陀慈愛の權化にあらずや、后は是れ切々たる菩薩悲心の實現にあらずや。后の胸中大慈大悲の矜哀宿れるにあらずむは。何ぞ無緣の衆生を憐憫する此の如くならむや。殊に人に語る勿れと云ふに至りては意義適切、實に慈善は人に示す爲にあらざる也。蓋し奈良朝は宗教的經營及社會事業の發達其極に達せるもの。是れ、偉大なる信仰の靈火內心に燃ゆたるの結果たらずむはあらざる也。

* * * * * *

鎌倉時代は日本佛教の精華也。信仰の圓熟正さに其極に達すると共に、其理想を社會上に實現し來りて、實に昇平の天下を開闢せり。故に當代に在りては嘗て奈良朝時代に於て施設せられたる、宗教的經營及び社會事業は再び光輝を放ち來りて其生命を復活せり。看よ聖武天皇か此の如く苦心經營の餘に成れる、東大寺大佛殿は兵燹に罹れり。而して朝廷乃ち俊乘坊重源に命じて大勸進たらしめ、源頼朝周防一國を以て造營料所に充て、遂に此大經營を再興したるにあらずや。而して重源か勸進の方法を見る、實に聖武帝の精神躍如として見つべきものあり。

重源は法然聖人の弟子也。朝廷初め法然聖人に命じて勸進たらしめむとす、聖人重源を推薦す。重源院宣を奉じて以爲らく、昔聖武帝斯役を擧くるや、王者の威福を以てして猶寄附を天下に募り玉ふ。蓋し勝利を百姓に分ち玉はむが爲也。我豈聖旨を奉戴せずして可ならむやと。重源巧みに考へ、一輪車を作り、大さ身を容るべく、左に詔書を揭げ、右に趣意書を貼り、各國に巡行して萬民を勸勵せり。世に傳ふ、重源先つ京を辭して江州に入る、心に以爲、何人を以て先つ喜捨せしめむかと。路傍に乞丐あり、錢一文を他より乞ひ得たるを見、重源直ちに就きて之を喜捨せむことを求む。乞丐聽かずして曰く。我食するに物なし、乃ち他より乞ひ得たるもの、我爲れぞ之を他に與へむやと。重源重て請ふ、聽かず。乞丐遂に塵を拂ふて去る。重源之を追ふこと數里、乞丐遂に其煩に堪へず、之を地に投じて去らむす。重源乃ち恭しく之を拜し、袖を執りて語りて曰く。汝生れて貧賤也、是過去に於て

慳貪なるが爲也。而して今世慳貪なる亦此の如し。我强て汝に求むる所以のもの。汝を以て東大寺大佛殿再建喜捨の最初たらしめ、以て汝か冥福を積ましめむと欲せし耳と。情濃かに言亦溫かなり。乞丐深く感じて道に入れりといふ。豈意味深き說話にあらずや。宜なる哉、重源命を奉ずるや、直ちに伊勢の大廟に詣し、靈告を蒙りて、新寫大般若經六百卷を轉讀して造營を祈る。誰か其森嚴なる態度に感激せざるものあらむや。

既に此の如く聖武天皇の事業を再興するものあり、豈亦光明皇后の芳跡を追ふものなからむや。果して忍性上人あり、上人亦南都より鹿島神宮に詣し、三日參籠法華を讀誦して戒律の再興を祈る、屢大般若を書寫し文殊及觀音の像を作る、初め南都に在り同學に語て曰く。東國未だ人あらず、我往きて度せむかなと。遂に鎌倉極樂寺に住し、此所に於て百般の慈善事業を起す。殊に癩病患者を收容し、藥湯を作りて之を治す。其施設經營歷々として今猶徵すべきものあり。江島は實に當時の離隔所たりしといふ。其馬病院の如き實に注意の周到なる、殆むど人の意表に出づ。是畢竟律師か慈愛の溢るゝ所、自ら到る所人をして其德澤に浴せしめしものにあらずや、殊に南都に在りて、王畿附近に於ける癩病人萬餘を集め食を施し。光明皇后の、十八間長屋を再興して藥湯を作り、之を治療し、曉に自ら癩病人を負ひて市中に詣き、夕へに之を負ひて舊舍に歸る。風雨寒暑と雖決して缺かすといふ、豈是生ける佛陀に非ずや、頭を回らせば年所既に七百年、十八間長屋の遺跡は空しく殘りて、黑風白雨當年の芳躅を追慕せしむ、今や二十世紀の新氣運は社會事業慈惠事業に向て多大の力を要するの時機。西洋各國に於て基督教徒は癩病患者の救濟に向て大に力を致せり。而して我國に於ける四個の癩病院は皆彼教徒の手に成りて、佛教徒の未だ起て此等の事業に着手するものなし。豈遺憾ならずや。殊に忍性上人は四天王寺に詣し、聖德太子の鴻業を追慕し、處々に療病悲田の兩院を構ふ。其桑谷療病所は二十歲間に於て痊ゆる者四萬六千八百人、死する者一萬四百五十人たりしといふ、當時の時代にして此の如き大事業を成功する所以のもの、實に信念の橫溢せる結果たらずむはあらざる也。

嗚呼前にしては聖武天皇、光明皇后あり。後にしては重源大德、忍性律師あり。遠大聖釋尊の淸淨なる源流を汲みて。萬靈の枯渴を救濟し、理想の國土を實現し給ふ、信仰的偉力は煥として千古夫れ明らかなり。苟も佛教徒たるもの感激する所なくして可ならむや。聊か宗教的經營及び社會事業の精神を論ずること此の如し。

新論を讀む

有馬祐政

『新論』とは水戸藩の名士、會澤正志の著はす所。今より百二十八年前の記述にして、而も上下二卷の片片たる小冊子なりと雖も、本邦の國體を論じ、天下の形勢を述べ、特に諸外國の事情を說きて、之が防禦の術を陳し、以を皇運奎昌の長計を立てたる所、最も現今の事體に適切なるものあり。曾に現代世上の論述する所を盡くせるのみならず、尙ほ其の上に出て、眼識の精鋭、筆勢の雄健、眞に懦夫も起ちて勇進猛鬪を辭せざるの概なくんばあらざる也。余は固より時事を論議するを好む者にあらずと雖も、親しく此の書を讀みて、感慨措く能はず、此に其の大要を記して、一は世人の考慮に資し、一は著者の精神を傳ふること丶爲せり。

正志、名は安、字は伯民、通稱は恒藏、光格天皇の天明二年、紀元二千四百四十二年、德川十代將軍家治の末年、恰も塙保己一の『群書類聚』正に終を告げし年において生まれき。資性沈毅勇敢、幼より藤田幽谷に依りて字を知り道を學び、竟に大義名分に明かなるに至れり。惟ふに水戸の學風や夙に一大異彩を放ち、黃門光圀卿以來、儒教を以て國藩の文教を維持し、別に儒者なる專門家を置かずして、藩士は悉く皆儒者たり、道德者たり、政治家たり又軍人たらしめられ、而して其の國史編纂修正の大事業を起して歷史討究を力むるに至つては、皇室の尊嚴にして神道の眞聖なることを知悉して、自から之れが顯揚に盡瘁することゝなり、即ち忠孝一本の主義を唱へ、國家振大の目的を標したる也。安積澹泊、大內熊耳、立原翠軒、藤田幽谷、同東湖、靑山延于、同延光等、いはゆる水戸學者の驍將にして、其の他、豐田天功、武田耕雲齋の如き、尊皇愛國の志士、枚擧に遑あらざる也、正志も亦能く此の學風を以て立ちたる者にして、其の識見氣魄敢て以上の諸子に讓らず、而も氣力の壯んなること、遙に群を拔けり、弱冠にして寸鐵先生の稱を博し、終始侃諤以て世の弊俗を矯正せり、諸官に歷任し、進んで彰考館總裁を攝し、或は郡奉行となり、或は通事となり、又弘道館督學に任せられき即ち齊昭烈公を助けて刊修の事、玆に治政の業を全うしたり。孝明天皇の文久三年、紀元二千五百二十三年、十四代將軍家茂の世、國事多端たる頃、八十二歲を以て逝きぬ。著書に『文獻志』『學制略說』『禦侮策』及び『時務策』等あり。『新論』は文政八年幕府攘夷を天下に令したるの際に及んで、平素の持論を藩侯に獻つりたるものとす。

卷首に記して曰はく、「謹んで按ずるに、神州は太陽の出る所、元氣の始まる所、天日の嗣、世々宸極を御し、終古易らず、固より大地の元首、而して萬國の綱紀也、誠に宜しく宇內に照臨して、皇化の暨ぶ所、遠邇あることなかるべし」。其の國家生生主義を以て立てるや明白也。之れについて曰はく、「而るに今西荒蠻夷、壓足の賤を以て、四海に奔走し、諸國に蹂躪す、眇視跛履、敢て上國を凌駕せんと欲す、何ぞ其れ驕れるや」。慷慨悲憤の狀眞に目睹すべし。當時にれいてすら猶ほ且つ然り、若し今日に在らしめば果して如何。蓋し神州男兒の面目彼れにれいて明かに見ることを得らるゝ也。

而して「臣自ら誓つて身を以て天地に殉するもの此の書にあり」と絕叫するに至りては、愛國の赤心うたゝ切なりと謂はざるべからず。

彼は億兆心を一にして國威を海外に宣べ、土宇を開拓し、天祖の貽謀、天孫の繼述、深意の存する所を體察して、此の目的を成就すべしと爲し、熾んに虜人の强梁を記述して、全然之れを膺懲し、之れを擯除すべきことを主張せり。曰はく、「任那の守らざる、勃海の貢せざる、亦既に久し、而して蝦夷諸島の如き、亦日に蠶食に就く。內地と雖も、而も一水の外、直ちに虜人の巢窟となる、いはゆる先王日に國を辟くこと百里、今や日に國を蹙ること百里なるもの、獨り周人の嘆する所のみにあらざる也。日に蹙まるの勢に處り、日に辟くるの虜を待つ、戰を畏るゝの俗を用ひて、以て百戰の寇に抗す。何んぞ寒心せざるを得んや」。之れを今日に比す、當らざるもの多しと雖も、某が蠶食の狀と、我が畏戰の風とは、之れを事實にあらずといふべからざるが如し。百年の昔と異らざる現代の形勢又焉んぞ寒心又寒心を爲さゞるを得んや。文明といひ、進步といふもの、決して輕々に解し去るべきものならんや。戒しむべし。戒しむべし。

而して就中露西亞に關して記して曰はく、「鄂羅斯の若きも、亦嘗て佛郎察等と肩を比して熱馬に役屬せり。近時に至つては則ち猖獗特に甚だしく、新に至尊の號を稱ふ、其の地諸國の東西を包み、神州の東北に綿亘す」。嗚呼露國の猖獗なる、既に一百餘年前において我が會澤氏の觀破せし所にして、其の呑噬の暴慾一朝の事にあらざるを知るべし。更に其の險惡の狀を詳叙して曰へらく、「然れども猶ほ窮髮の北に僻在して未だ志を南方に得ず、百兒西嘗て衰亂す、鄂羅斯爲めに之れを興複し、兵を合して度爾を擊破せり。百兒西、鄂羅と合すれば、則ち度爾其の左臂を斷たる、鄂羅素より大地の北に彌亘し、而して之れが領襟たり。今又磬勢南海に震ふ、大地を中斷して、其の咽喉を扼す、度爾をして莫臥兒と合するを得ざらしむ。滿淸の威亦此に限られ、而して西破するを得ず。隣國の權を攙め、而して以て四方を嚇す、絕を繼ぎ滅を興すの義を假りて、以て其の盛を鳴らす、熾焰煽る所、百蠻震恐す。之れ其の勢ひ宇內を席卷して盡く之れを臣とするに非んば則ち止まざる也」。吾人も亦露國の大野心を確認しをれり。特に義を假りて、其の盛を鳴らす所、最も彼が慣用手段

にして、即ち人面獸心の非難を免れざるべきなり。遂に會澤氏は滿清よりして事を神州に進めて曰はく、「且つ古より漢土を病ましむる者は西羌北胡なり、前に五胡の亂あり、後に沙陀、契丹、女眞、蒙古あり、遂に其の地を踐みて皇帝を稱するに至れり。今鄂羅は既に兼ねて羌胡の勢を挾む、其の勢ひ清を圖らざるを得ず、然れども清猶强盛、未だ問し易からず、故に顧みて神州に涎す」。然れども我が神州には神氣の存するありて、敢て彼の乘ずる所とならざりしも、現に滿清は次第に併呑の厄を受けつゝあり、是れ亦會澤氏の見を多とすべき也。

又直ちに筆を露國征略の方法に向けて左の如くに言へり。

「彼れ其の勢ひ志を、神州に得て、然る後我が民を驅りて以て閩浙を擾し、往時海賊を明人倭寇と稱する所の者の如くにし、而して清の東南を罷弊せしめ、翼に乘して哈密、滿州等の地を取り、直ちに北京を衝かんと欲するのみ。是の如くなれば則ち滿清も又將に支ふる能はさらんとす。膚能く滿清の地を得ば、則ち莫臥兒を覆へし、百兒を提さげ、而して度爾を殪すこと枯を拉くが如し、或は東方未だ問ひ易からずして、而も滿清又未だ遽かに克つべからずんば、則ち彼れ將に先づ西方に事せんとす。四方翼あらば則ち百兒と度爾を圖り、若し能く之れに克たば、則ち南莫臥兒を襲ひ、滿清と準噶爾の故地を爭ふ、而して長驅清に臨み、既に清に克つを得ば、則ち將に連艦以て神州に偪らんとす。の此二策は或は東よりして西し、或は西よりして東するもの、膚將に時を相し變を察し而して其の一を用ひんとす。一能く濟すあらば則ち宇內を朐とするの形成ると」。彼是の交通未だ成らずして、晦暗茫漠たりし時世にれいて、變幻窟まりなき鄂羅の秘意を洞見し、縱横揣摩するの眼識、吾人又之れを偉とせざるべからず。其の第一策なるものは我の剛强に依りて竟に施こす所なかりしと雖も、其の第二策に至つては、今現前に吾人が齊しく目擊しつゝある所ならずや。即ち現時においても、其の深患たる所以のもの復た女眞蒙古の比にあらざるや知るべきのみ。

彼は宇內の七雄を以て周末のいはゆる七雄に配し、鄂羅を以て秦とし、度爾を以て楚とし、滿清を齊とし、莫臥兒を韓百兒亞を魏とし、更に熱馬、佛郎察、伊斯把、諳厄利諸國を以て趙、又は宋、衛又は中山と爲せり。而して日本を以て燕に比し、又周に類せりとし」獨り孤城を保ち、隣敵境を築き、日將に偪らんとするの境遇に在るものなりと論じ、遂に「其の殊に擴げざるを得ざる者は、鄂羅に若くはなし」と斷言するに至れり。

鋒を轉して、西夷諸國が海上に跋扈する所以に說き及び、彼等は大いに人に過絕する智勇あるにあらず、甚だ民に洽き仁恩もなく、修備せざるはなきの禮樂刑政もなく、又人力の及ぶべからざる神道鬼沒をも有せず、唯一に耶蘇教あるに

依ると爲せり。蓋し彼のいはゆる教法なるものは邪僻淺陋なれども、巧言繁辭、以て民心を煽惑し、遂に人の國家を傾けんと期するものにして、要するに侵略に對する豫備的妖術に外ならざる也。獨滿清は未だ此の邪法を信ぜず、我と脣齒の關係ありと雖も、佛郎察然り、伊斯把然り、波爾杜兎然り、諳厄利然り、況んや鄂羅においてをや。「鄂羅は既に西荒を平らげ、乃ち東止百里を收め、潛に黑龍江に入り、益々東畧を事とし、中國を窺伺すること殆んど一百年。其の初め洋中に出沒し、以て吾が地形を測り、吾が動靜を闚ひ、而して又吾が人民を誘ふ。尋いで禮を厚うして以て通商を乞ひ、黠計行はれざるに及んでは、乃ち蝦夷を劫やかして、吾が官府を焚き、吾が戎器を掠め、而して又更に通市を要む。是れ其の闚伺漸あり、而して其の請求或は自ら飾るに禮を以てし、或は人を嚇すに兵を以てし、百方兼ね施し、其の術至らざるなし。而して其の意亦知るべき也と」。實に鑿鑿其の胸臆を穿つの想あり、其の他虜情を說くこと精到にして、能く其の肯綮に中れるものあり、百年後の交通親密なる時代に生まれたる吾人をして屢々驚嘆せしむる言句滿載せらる。さすがは水戸藩の名士、吾人は同藩が風教の敦厚にして見識の超邁なるを追慕して已まざる者也。

但し諳厄利の來航を以て鄂羅の使嗾に出づると爲したるなど、一二事實を誤るものなきにあらずと雖も、言々句々皆根柢あり、深く天下の形勢を論ずること、恰も山上に立ちて近郊を指顧するが如く、之れを古今の情態に照らすに、誠に不易の確說と謂ふべし。而して當時幕府の措置宜しきを得、國民の元氣盛んなるを稱し、尙ほ守禦の方法として、先づ和戰の策を講じて天下の歸嚮する所を知らしめ、斷然天下を必死の地に置き、古人のいはゆる朝野をして常に虜兵の境に在るが如くならしむるは即ち國家の福なりと爲し、而る後、一に內政を脩むること、即ち士風を興し、奢靡を禁じ、萬民を安んじ、賢才を舉ぐべし、二に軍令を飾ること、即ち驕兵を汰し、兵衆を增し、訓練を精くすべし、三に邦國を富ますべし、四に守備を愼つべし、之れに加ふるに、新たに屯兵を設け、斥候を明かにし、水兵を繕ひ、火器を練り、資糧を峙ち、特に神道に依りて崇祖の念を厚うし、儒教に依つて忠孝の心を養ひ、祖孫一氣、天人一氣の理を覺りて、正大光明、人倫を明かにして以て天心を奉し、天神を尊びて以て人事を盡くし、萬物を發育して以て天地生養の德を體し、四海を以て一家と爲し、萬世を一日と爲し、列聖の遺緖に依り、太陽の威明を揭げて、以て四海萬國に照臨し、一朝變あらば、即ち大いに敵愾の師を興し、天神の糧を食ひ、天神の兵を揮ひ、天神の仁に伏り、而して其の威を奮ひ、以て天下に方行し、大孝大忠を果すことを期すべし」と說きぬ。又是れ大略吾人の意を得たるもの也。

然れども人に制せられんことを嫌ふの餘り、却つて人を制せんことを主張して、國家利己主義に陷れるは、蓋し水戸藩士の通習として、未だ大平等大慈悲に依りて成立せる佛教の大光明に接せざるが致す所にして、人道に戻り天道に背く者は、固より其の何物たるに論なく、之れを膺懲し之れを攘除すること、我が神州男兒として必らず斷行すべき所なるが上に、普通人類としても亦當に處決すべき所ならずんばあらず況んや我が神州に凌辱を加へんとするものにおいてをや。然りと雖も兵は本と不祥の器なり、已むを得ずして東すべきのみ。「果して矜る勿れ、果して伐る勿れ、果して驕る勿れ」とは獨り老子一家の私言にあらず。全社會全人類共通の利益幸福を計ること、是れ最も吾人神州民族の本務なるべく、而も人生の極致、宇宙の公理、豈に之れを措いて又他に存せんや然り而して此の如きは唯專ら佛教に信順するに依りてのみ自然に體達し得べき所。吾人の常に理想とする所也。余は倫理の方面において寛大なる國家主義を立つる所以のもの、歸する所、全く此に在つて存する也。頃ろ「新論」を讀み、頗る時事に關し最も痛快なるものあるが故に、主に其の關係ある部分のみを略記して、博く讀者と共に發揮する所あらんと欲す。

大空の雨はわきても注かれど
うろふ草木は已かさま〳〵　（花山院御製）

獨逸勞働組合の發達（下）

池山榮吉

◎方今勞働組合の最も發達して居るところは英吉利で、組合に加入せる勞働者の員數凡そ百七十萬、之に次ぐものは北米合衆國で、組合員の數凡そ百萬、そのまた次位にあるものは獨逸で、組合員凡そ七十萬と稱する。而して爾餘の諸國は遠く之に及ばない、英吉利に於て、勞働組合の組織を成せる勞働者と否らざる勞働者との比例は、詳はしくは譯らないが、幼少年勞働者を除き、組合に加入せる男子勞働者は二割一分、女子勞働者は一割二分に當つて居るが、獨逸では組合加入の勞働者は工業勞働者（六百萬人）の一割一分にしか當つて居ない、加之獨逸で實際勞働者組合を組織して居る勞働者は、主として工業勞働者で、農業勞働者は之を組織することが出來ないことになつて居るのであるから、若し農業勞働者を合算して比例を採れば、その割合は餘程減ずるに違いない、之に反して、英國に於ける、組合加入の勞働者中より、農業勞働者を除いて計算して見れば、組合組織を成せる男子勞働者は、二割一分より增して二割五分となる勘定である。斯く獨逸勞働組合が、創業日淺しといふでもないに、員數に於ても、比例に於ても、英吉利に比して、未だその半ばにも達して居らないことを見ると、獨逸の地面は、或は到底勞働組合の發育に適して居らない樣にも思はれるが、必ずしも然うでないことは、前號及び前々號に述べた通り、獨逸勞働組合、殊に社會主義勞働組合の、當初幾多の厄運に遭遇して、消長常なき有樣であつたにも關らず、近く十數年來に於ては、頭る目覺しき發展を爲したるに徵しても知れることである。況んや、縱し諸他の事情を措いて考へて見ても、發生以來未だ四十年に滿たざる獨逸勞働組合が、百年の沿革を有する英吉利勞働組合の盛に及ばざるは、固より怪むに足らないとて、比較的短少なる期間に於て、兎に角七十萬の勞働者を包容し、七百萬馬克の歲出を辨ずるに至りたるは、寧ろ多とすべく、前途頗る好望に富むものといふべきである。

◎獨逸勞働組合の、今日までの來歷は、同國の政治、經濟、宗教、其他諸般の事情の相待つて然らしめたものであるとは固よりであるが、さてこの事情の中には、勞働組合發達を助長する因となつたものと、之を阻害する素をなしたものとある。今その因素たるものを、一々茲に列擧して論ずるは、到底出來ないことであるから、そのうち重要にして、且正確なりと認められるものを觀察することゝして、先づ阻害的因素の方から始めやう。

▲獨逸立法の勞働組合に對する規定、殊に夫の社會黨撲滅法の如き、又夫の政社の聯結を禁ずる規定の如きが、如何に社會主義勞働組合の發達を害したるかは、前號に述べた通りである。その他、農業勞働者の、勞働條件改善の爲めにする集會、結社の禁の如き、將た又勞働組合に加入せざる勞働者にして、組合の利益に相反する態度を採るものに對して、排斥の宣言を爲す禁の如き、孰れも組合の發達に、いかばかり不利な影響を及ぼすかは理の睹易き所で（百二號參看）而して又『罷工の背後に革命の怪物蹲踞せり』と揣摩せる時代（前號參看）に當り、勞働組合に對する行政の、極めて峻酷なるものありしは、是れまた想像するに難からざる所である。要するに、是等の立法及び行政は、慥かに組合の發達を阻害する因となつたものであるが、是は決して組合に採つて、踰ゆべからざる障碍を形作つたものではないことは、社會黨撲滅法の行はれつゝありし間に、組合員の增加したるに徵して知ることを得べきのみならず（前號參看）、夫の抑壓は、組合の外部に向つての擴大を妨げたるだけ。夫だけ却てまた內部の結合を鞏固にする効を遺したものである。

▲右の外、强制保險の制に因り、疾病、災害、養老、死亡の場合に於ける勞働者の保險が、國家の手に委せられたるは、

勞働組合に採つては、慥かに一大打撃であつたので、單に組合發達の點から視れば、是亦慥かに國家の行動が、阻遏的因素となつたのである。何がさて、其の立法の目的は、勞働者運動をして、言を藉る所なからしめんとするにあつたのだといふ評もある位で、英吉利の勞働組合が、這種の保險を自ら經營し、是を以て勞働者を引寄せる極めて有力なる方便としてあるに反し、獨逸勞働組合が、この利器を缺けるが爲め、自家勢力の發展上、如何に不便を感ずるかは智者を待つて後知るべきでない。

▲けれども、獨逸勞働組合の發達を阻遏せる主因ともみるべきは、勞働組合が政黨に依つて經營されたとて、是からして第一に生じたる弊害は、勞働組合に分立といふとてある。即、前既に述へた如く、進歩主義、マルクス派、及びラッサル派社會主義、といふ三派の勞働組合が同時に成立して、各派互に相排して互に勢力を相殺しつゝあるのである、尤も社會主義の兩派は後に合併したが、社會主義組合と、進歩主義組合との聯合ひは、今尚ほ昨の如して、進歩主義組合の如きは、設立當時よりして、組合加入者より、其の現在社會黨員にあらざるは勿論、將來とも決して同黨員となるまじといふ證書を入れさせる定めになつて居つて、今日でも矢張さうである。斯く大概管ならざる兩派が、事に臨んで共同の態度を採ることの難きは、固よりその所で、之が爲め一組合の計畫が、屢々實行されず、齟齬することあるべきは數の免かれさる所てある。此の如きは、勞働組合全体の發達から見ると、誠に悲しむべき現象といはざるを得ない。而して其禍根をたづぬれば、要するに、勞働組合が、政黨が因緣を有し、本來組合と何等關係なかるべき筈の、政黨的臭味を帶ぶるに胚胎するのてある。近時目覺しき勢を以て發展しつゝある、所謂基督教主義勞働組合の如きも、畢竟從來の勞働組合が、政黨、殊に社會黨の臭味を帶びて居て、勞働者間に、反宗教的氣風を吹き込む傾があるに刺戟されて起つたので、斯く諸種の勞働組合が、政治上（又は宗教上）の視點から分立對峙して居るといふのは、誠に困つたものであるが、勢の然らしむどころ、如何とも致しかたがないのてある。

▲次に勞働組合が、本來目的、性質を異にして居る、政黨と提携するより生する弊害は、動もすれば組合が政黨に利用され、政黨の手段となり、お伴となることで、この弊は、社會主義勞働組合に於て最も著しい。就中夫のラッサル派社會黨の如きに在ては、其の始め、黨の立場より勞働組合の成立を認むべきや否やといふとが問題となつた位で（前號參看）、千八百七十二年の伯林大會、翌七十三年のフランクフルト、大會及び其翌七十四年のハノーヴァー大會に於ては、同派勞働組合を解散し、組合員をして悉く同派黨員たらしめんことを議定した。マルクス派社會黨に在つては、始めより勞働組合の

必要を認めてかゝつたから、その存廢が眞面目に問題となるやうなことはなかつたが、黨の指導者、其他生粹の社會主義者の眼中には、組合の自存目的なるものなく、組合を以て黨勢擴張の具と看做したるは勿論で、夫の組合の指導者たる地位にありしレギエンすら、千八百九十二年伯林に開ける黨大會に於て『我黨は、我黨々員たる者が勞働組合に所屬し、組合の決議にして、組合的地盤を離れず、且つ黨の主義に違背せざるものに服從するは、我黨々員たる者の義務なりと宣言す、（中畧）我黨は、勞働組合に於て、勞働者に對し、階級戰爭に必要なる薫陶の行はるゝを認む』といふ決議案を提出したのを見ても、當時に於ける政黨以本の思想の一班を窺知ることが出來る。

◎前數項に述べた事項は、獨逸勞働組合の發達を阻遏したには違いないが、併し縱し是等の因素がなかつたにせよ、獨逸勞働組合が、夫の英國のに匹敵すべき、若くは少くとも近似すべき盛運に達するといふ工合には、到底行かなかつたらふといふ理由が別にある。それは他でもない、組合創業の時代、即千八百七十年前後には、獨逸の經濟事情が未だ比較的甚だ幼稚であつて、始めて資本的發達の端が啓けたといふ位に止まり、八十年代に至り、やう〳〵その第二期に入つたといふ始末であつたのだから、經濟發達の反映たる勞働組合の、獨り勝手に進歩することの出來ないのは當然てある。而るに、こゝ十數年以來、獨逸勞働組合が、急に長足の進歩を爲したるは何故かといふに、九十年代に入りてより以來、獨逸經濟界の驚くべき膨張を爲し、將に英の壘を摩せんとする勢をさへ現はすに至りたるは、蓋しその主たる因素で、勞働組合が爾今此の地盤の上に、着々その歩武を進め得へき機も機、恰もよし、政黨對組合の關係の弛解する傾向を生じたるは、益々組合の發達を容易ならしむる效があつたのである。

▲勞働組合が、政治上中立の態度を採るべきや否やといふことが、千八百九十六年ゴーターに開かれた黨大會に於て問題となつた時、組合の領袖レギエンは、勞働組合は社會政策を行ふべきも、黨の政策に關與すべきものでないと主張して『經濟上の戰には、個人の政見の如何を問はず、總べての力を合同する必要がある、社會政策は、社會黨に固有なるものでない、されば社會黨員でない者でも、猶よく社會政策を行ふことが出來る』と論じたが、黨の有力者ジンゲルは之に反し『勞働組合は勞働者の階級的知覺を養ひ、社會黨にその兵士を供給するものである、されば吾人は今日法制の爲めに餘儀なくされて、縱令分れて進軍するも、いざ開戰の曉には、組合と政黨とは、常に連合して敵に當るべきである』と主張した。千八百九十九年ハノーヴァーに開きたる黨大會に於ても、亦同一の問題が非常に八釜しかつたが、黨の領袖ベーベルは、勞働組合からは、總べて政治的臭味を除去しなければならな

い、組合の運動は、社會黨の運動ではなくて、勞働者の階級運動である。と論じた。が、是が必しも社會黨の定論でないことは、同年ブルクゼル市に開いた、萬國社會黨會議に於て、同じく獨逸社會黨の領袖たるリーブクネヒト及びジンゲルが勞働組合の運動を、政治運動より分離するは、彼等の忍ぶ能はざる所である、と主張したるに徴しても知ることが出來る。が、兎に角組合側に於ては、分離說の追々優勢を占めて來るのは事實で、この事實はまた、近數年來、黨務の傍ら組合の事務を見るといふ樣なのでない、自家の能力を主として組合の利益の奬進に供する、純然たる組合事務家が續出して、組合指導の任に當るといふ實際に因て確められて居る。て、斯樣な連中が殖れば殖える程、組合は政黨の後見を脫して、獨立の地歩を占め、自家本來の目的に向て專注することが出來るやうになるのである。

◉之を要するに、獨逸勞働組合は、初めに政黨の手で植え付けられたが因果、始終それが纏綿して、今日まで其弊に惱まされて居る。即、社會主義勞働組合は、動もすれば社會黨のお先きに使はれる虞れがあると同時に、この虞れがあるが爲めに、また到底勞働者全体を網羅することが出來ないで、勢ひ異主義の勞働組合に誘起せざるを得ない。而してこの異主義（進歩主義、基督主義等）の勞働組合も、亦元と最多數の勞働者を包容する社會黨、若くは社會主義勞働組合を、向ふに廻はして立つ以上は、始めより小成に滿足するの覺悟をせねばならぬ、といふ苦しい破目になつて居る。然し社會主義組合が、黨より漸次分離する傾向が見えて來た以上は、將來その程度の進むに連れて、從つて同組合と他の組合との間の隔が近くなる譯で、果して然うなるとすれば、組合の發達は甚た容易に、甚た健全になることてあらう、がそれはともあれ、從來の儘で推し進むにしても。獨逸勞働組合の、尙ほ幾多の發達を爲すべき途中にあるものなることは、毫も疑ふべきでないのである。

◉我徒は、以上獨逸勞働組合の發達、及び其由來を說明した。が、さて我國將來の、勞働組合發達の狀況は如何（我國に於ても、必ず勞働組合の發達せざるべからざる理由は嘗つて論じて置いた）といふに、我徒は竊かに、我國勞働組合も、亦幾つかに分裂すべき點に於て、政黨的なるべき點に於て、而も其一は進歩（即自由）主義にして、他は社會主義なるべき點に於て、幾何か獨逸勞働組合の發達に似るなきかを疑ひ、且つ憂ふるもので、こゝに獨逸勞働組合の發達を紹介したのも、此點に就て識者の熟慮を煩はしたいからのことである。

常ならぬ我身は水の月なれは
世に住み遠けむ事も覺えす　（小辨）

自然の教訓

千野哲次

谿聲便是廣長舌。　山色豈非清淨身。　夜來八万四千偈。　他日如何舉似人。

夫れ鶯聲を聞かば即ち悅び、蛙聲を聞けば即ち厭ふ。花を見ては之を培はんとを思ひ、草を見ては之を去らむとを欲す、是れ人情の常なり。然れどもかゝる愛憎厚薄の由て來る所を尋ぬるに、全く私心の致す所。今天地の心を以て心とせば、萬象萬有皆盡く生々たる元氣の活動、自然妙理の顯現にして其眼に觸れ、耳に感するもの、一として崇敬欣慕の情を興さゞるはなし。如何ぞ其間に彼此の殊別を生ぜんや。吾人の畏忌する蛇蝎虛狼將た震雷風雨の如きすら、吾人を警醒敎導するの良師たり。何ぞ況んや、花鳥風月山紫水明に於てをや。階前の薔薇、山頭の松風、雲外の朗月、深叢の吟蛩、乃至一草一葉皆至妙の天樂ならずば、極致の美神にして、恒に吾人の賞玩模倣を俟つ。潺湲たる谿聲、紫翠の山色、そも何をか語り、何をか示す。今佐藤一齋翁の語を假り來らむか。

仰觀山厚重不遷。俯見水汪洋無極。仰觀山春秋變化。俯見水晝夜流注。仰觀山吐雲吐霧。俯見水揭波起瀾。仰觀山巒疊其頂。俯見水遠蹤其源。山水無心以人爲心。一俯一仰。莫非敎也。

實に此宇宙は、擧けて是れ一大舞台にして、其中の萬象は悉く是れ變々化々の大活劇を演ずるもの。吾人に無限の娛樂を與ふるの中、又無上の敎訓を垂る。其吾人に對するの狀、恰も父母の赤子に於けるか如く、撫育愛養至らざるはなし。人一度私心を去りて、此妙味を味ふを得ば、玆に豁然別天地の闢けたるの感あるべし。佛家の敎に柳染觀音微妙相、松吹說法度生聲。又曰く、青々翠竹盡是法身。鬱々黃華無非般若。又曰く、蝦蟇上二落葉一唱正覺。蜩蟬鳴二高樹一轉二法輪一。

歌に曰く。

春は花、夏は橘、秋は菊、何時も絕ねせぬ法の花山
花は花、紅葉は紅葉、其まゝに言はて敎ゆる法の花山

未成年者に對する犯罪

豫防の手段

小河滋次郎

未成年者の犯罪及び總べての不良行爲を既發に救ふの必要なるは勿論なりと雖も、同時に亦之を未發に豫防するの道を講ずること最も急務なりと謂ふべし、幼年保護問題が社會問題―社會政策問題の主たる客体物たらざるべからざるは即ち之れが爲めなり、犯罪を未發に豫防せんとならば、先づ之を生ずるに至らしむ原因に就て研究する所なかるべからず。其原因を大別して社會的及び個人的の二種となす、如何か是れ犯罪の原因として、認むべき社會的及び個人的關係なるかを列舉せんことは、恰も大河の泉流に遡つて一々之を探撿指示せんとするに同じく、到底不可能なること勿論なりと雖も、余は此に試みに未成年者に對する犯罪の原因と認むべき重もなる項目を略説し、社會的方面より恊心戮力して以て之を豫防制遏するの必要ある所以を觀察すべし。

小説新聞の類が人を感化するの勢力の大なることは、何人も否認する能はざる所の事實にして、之を善導するの裏面には之を惡化する力の大なるものあるべきは亦自然の理なり、小説新聞の一國風敎の消長に至大の關係を有する所以にして、識者の一般に既に確認する所なるを以て、今復た此に之を詳説するの必要あるを見ず。然るに今日の新聞に所謂三面記事なる所のものは、果して能く一國の風敎殊に兒童の感化に何等の惡影響なしと云ふを得るか、家庭團欒の間に採つて一讀に堪へざるの記事少からざるにも拘はらず、幼者の耽讀する所は即ち此にありて、新聞の目的とする所亦專ら幼童婦女子にあるかの感なきに非ず、新奇又は醜惡なる出來事殊に舞文羅織せる、總べての犯罪事件に關する所謂三面記事なる所のものが、如何に惡感化を一般の犯罪者特に未成年犯罪者の上に及ぼしつゝあるやの事實は、余輩の日々に實驗する所にして、少くも何々事件と稱し新聞の小説又は三面記事の上に掲げられて稍々人目を惹きし所のものが驚くべき記臆を以て、不完熟なる幼年犯罪者の腦裏に存するの事實は、如何に彼れに犯罪の動機を與へつゝあるかは一班を證明し得るに足れりと信ず、チュソールは其著摸倣論の内に新聞記事の弊を痛論して曰く、「世人が彼れの誘惑に依つて歸着する所は、監獄に非ざれば即ち屍室、（自殺）屍室に非ざれば即ち癲狂院なり」と稻妻事件に相續て各地方に後繼者を出だすに至りたるが如き、倫敦に於ける「ホワイト、チャペル」の慘殺事件か（一八八一年）一たび新聞の好材料となつて盛んに歡迎せられたるの結果は、事後一年以内に同一の犯罪を見ること八件の多きに至りたると云ふが如き、近くば華族事件の頻發續生を見るが如き、新聞記事の勢力の犯罪其他總べての非社會的行爲の挑發に對して、如何に至大の關係を有するやは既に常識の能く之を想像するに難からざる所なり、（穗積博士著「摸倣と豫防警察」殊に一五頁以下、拙著「刑法改正案の二眼目」九一及び九九頁）余曾て犯罪と新聞の關係を論じ、新聞に對するの希望を述べて曰く、近來我國に於ても所謂大新聞と小新聞たるとに論なく、動もすれば輙ち單に其購讀範圍を擴張するの目的より、頻りに世の好奇心を利用して唯た譯もなく犯罪及び行刑等に關する記事を掲げんとするの傾向あるは、一國風敎の爲めに最も憂ふべきの現象なりと謂ふべし、（中略）余は世の新聞なるものに對して大に此に警省する所あらんことを切望せざるを得ず、蓋し新聞紙の記事は一般の公衆殊に未成年者、又は犯罪種族の者をして啻に模倣的性情を挑發馴致するの恐れあるのみならず、犯罪の工夫、苟免の手段等をも研究成効せしむるの憂ひあればなり云々」と未成年者に對して新聞の看讀を禁止すべしとの説を爲す者あるのみならず、既に尋常中學生に新聞禁止の校規を設くるの實例なきに非ずと雖、是れは一面の弊害に局して有効の半面を顧みざるの偏見たるを免がれずして、假りに有害を認めて禁止勵行の目的を達し得るとするも、其及ぶ所の範圍は極めて一小部分に制限せられたるものなりと謂はざるを得ず、余は獨り禁止の必要を認めざるのみならず、進んで之れか看讀の奬勵を希望する者なりと雖、同時にまた新聞に對して深く其記事に注意を加へ、犯罪、自殺、裁判、行刑其他常識を以て風敎に害ありと認め得らるべき記事の如きは、趣味の厚薄如何に拘はらず、努めて之れか掲載を避くるに至らしめんことを切望せざるを得ず、英國に於ては近年大に此に顧みる所あり、新聞同盟なるものを組織し、當業者間に於て互に相警戒を加へ、努めて風敎に害ありと認むべき記事、殊に犯罪事件、法庭傍聽筆記等の掲載を制限するの方針を取りつゝありと云ふ、社會事業として犯罪豫防に貢獻する所ある緊切の要點なりと謂ふべし、圖畫、演劇、寄席其他童兒を目的とする種々の見せ物の類が、兒童の風敎感化の上に少からざる直接の影響を及ぼすの事實も亦此に同しく、一面政府として此に相當の取締を加ふる所あると共に、一面また社會的に之か制裁を施すの道を講ずる所なかるへからず、學校生徒の劇場、寄席、舞踏場其他の興行場に出入するを禁ずることは、既に各國立法の實例に見る所にして、此點に於ては我國の如きは餘りに取締の放慢に失するの嫌ひなき能はざるものゝ如し、兒童の遊里に出入するを（假令ひ登樓せざるにもせよ又丁年者の同伴する者あるにもせよ）看過するか如きは、最も放慢の甚しきものなりと謂ふへし。

早年の幼者を自活に餘義なくせしむるのことは、彼れを早

熟せしむる所以にして、早熟は未成年犯罪者の主たる原因をなす所の者なり、營業取締上、年齢の上に制限を設くるの必要は即ち此に存す、彼のお酌「チヨボクレ」輕業、玉乘、獅子舞、法界節、樂隊、花賣、牛乳又は新聞配達等をして幼年者を虐使するの有害なるは言ふに及はす、之を職工として各種の工場に備役せしむるか如きことも亦之を嚴禁せさるへからす、我が工場法案の要領なるものに就て之を見れは、十一歳未滿の幼者は總へて職工徒弟として備役するを得ざらしむへしと云ふ、大体に於て敢て余の異議なき所なりと雖も、余は尚ほ進んて少くも義務教育の年齢期と一致するに至らしめんことを望む、余は將來に於て我か教育制度が其義務教育年齢を十四歳までに延長するに至るの時機あるへきをは信じて疑ざる所のものなり。放逸遊惰が幼者を罪惡に誘くの弊あるが如く、勞働自活も亦彼れを罪罪に誘くの弊極めて大なり、單純なる放逸に依つて罪惡に陷りたる所の者は、之れに教育を授け之れに職業を與へ、又之れが境遇を移すことに由つて能く改良感化するを得るの望みありと雖、既に早年にして幾分か自活放縱の味を嘗め、且つ一旦過度の勞働に懲りたる所の者は、再び之れに職業の趣味を感じ勉勵の慣習に馴致せしむると甚だ困難なるが故に、從つて改良感化の望みも亦甚だ乏しきの事實は是れまた實際の經驗に徴して明かなる所なり、之を要するに早年の幼者を勞働自活に餘儀なくせしむるの結果は、却て彼れを放逸遊惰に導くの弊あるのみならず、其精神及び身体の發育を阻止し、益々勞働及職業を嫌惡するの念を熾んならしむるが爲めに、終に彼れをして終世救ふべからざる社會平和の讎敵たらしむるに至るを免かれず、少年は未來の國民にして一國富强の消長は一に擊つて彼れの双肩にあり、彼れの膏血に衣食せんとする少數事業家の利害の如きは深く之を顧慮するに足らず、各國（佛國一八九〇年及一八九二年瑞典一八八九年、和蘭一八八九年、白耳義一八八九年及一八九〇年、魯國一八九〇年、葡國一八九一年、獨乙一八九一年（一九〇〇年頃更に一層緊縮なる制限を加へて之を勵行する由なり）諸威一八九二年、瑞西一八九三年、英國一八八九年及び一八九一年、米國一八九〇年刑法第五章第二二三條第三章第二八七乃至八九條第二九〇條乃至第二九三條）到る所に既に立法の實例を見ざるはなし、我國に於ても亦一日も早く幼者保護に關する營業取締法少くも所謂工場法案なるものゝ發布を見るに至らんことを切望すると共に、差向き先つ彼の乞食に類似せる所謂遊藝稼業なるものゝ手より、憐れむへき幼者を奪ひ來つて之に適當なる保護教養を加ふるに至らしめんことを希望せさるを得す。

未成年者に對し禁酒禁烟の必要ありとの說に就ては、余の敢て否認せんと欲する所に非さりしも、幼者犯罪の原因として實驗上寧ろ重きを食物殊に餅菓類の嗜好に置くの必要ありと信ず、諺に仆て死する者は少くして他くか爲めに倒るる

者多しとあるか如く、又食慾の人を殺すは劍の人を斬るよりも多しと云ふか如く、何人も食慾を有せさるはなしと雖も、殊に此慾情の旺んなる者幼者より甚しきはなく、さらぬだに節制力に乏しきの彼れは、食慾に對しては殆と全く之を節制する所を知らず、良家の子弟にして尚ほ然り、況んや常に欠乏の間に生育する所の下層社會の幼者に於てをや、幼年犯罪者として、入監する者の實況に就て之を調査するに、殆んと十中の七八までは單に食慾を充たさんとするの動機より犯罪するに至りたるの事實にして、甚しきは則ち一顆握飯を得んか爲めに火を放ち、一個の饅頭を買ふの資を得んか爲めに人を殺すに至りたるか如き者の例に乏しからす、是を以て或は單純に難苦窮乏の原因に歸する者ありと雖も、余輩の實驗する所に就て之を見れは獨り窮乏困苦か其直接原因たるのみならす、他にまた彼れをして此に至らしむ所以の有力なる原因あつて存すと云ふは他に非す、所謂買喰の惡慣習なるもの即ち是れなり、世人動もすれは兒童の請ふかまゝに多少の銅錢を投して以て之を菓舗に走らしむ、兒童は此に始めて錢の貴きを知り、幾度か之を得て常に慾望を充すか爲めに、彼れは終に節制の何物たる觀念を起すの遑まなく、斯くて稍々長して益々貪慾の旺んなるに從ひ多くの親は即ち誅求の急に堪ふる能はず、三回に一回十回に五回は之を拒絶せざるを得ず、拒絶せらるゝの彼は、唯た如何にしても其慾望を充たさんとするに專らにして亦他を顧みるに遑あらず、或は直に露店に入りて菓餅を掠め、或は先つ退いて錢を得るの手段を講ず、窃食、掏摸、窃盜搔ひ拂ひ等が此動機より生する所以の偶然ならざるを知るべき也、結局買喰ひなる所のものは幼者の食慾を助長し彼を總ての非行に導くの誘因たるを免れざるは爭ふべからざるの事實にして、昔し士人の子弟に犯罪者を出すことに少なく、今日現に都會地方に多數の幼年犯罪者を出す所以の重もなる原因は即ち此に在り、教育當局者の等閑視すべからざる所なるは勿論、家庭教養の上に一般社會が大に警戒を加へざるべからざる所の要點なりと云ふべし、未成年の總ての飲食店に出入するを禁するは勿論、或一定の年齢に達するまての幼者例へは十歳未滿の者に飲食物の販賣を禁止するか如き、寧ろ未成年者の飲酒喫烟等を禁止するものに比して遙かに幼者風教の維持の上に效果あるべきを信ず。

（次號完結）

信　家

續靜觀錄

(五) 佛陀の眞實

近角常觀

佛とは、如何なる方である。佛の力とは如何なるものであると尋ねられたときは、唯何んのことはない、佛とは慈悲な方である、眞實の塊である。又其御力で私を救ふて下さる、又常々私の汚を照して下されて、言ふに言はれぬ慰みを與へて下さるゝといふより外に言ひ樣はない、世に若し佛がましまさずば、世間はたしかに眞闇である、世に若し佛が在しまさずは、實に殺風景の極であろう。私は佛を信じたる爲めに、他の人よりも勝れて居るとは毫も思はぬ。されど私一個人としては若し此佛の救に與つからずは、迚も今日あることが出來ぬのである、又今日生きて居る甲斐もなきことである、細々ながらも世間が四方八面闇黑になりても其中に光りが輝き、如何に激しき風雨がありても、其間に言ふに言はれぬ暖かき御慈悲が身に浸み込む心地がする、佛の誓も、佛の力も、ひし〳〵と適切に感ぜらるゝ、親鸞聖人が「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちたる本願のかたじけなさよ」と述懷し玉ひたるも、他人の事を言はれたとは迚も思へない、かく佛の慈悲に攫まれ、光明に照されたとて、私が決して他人に比へて立派なる行が出來るとは毫も思はない、されど若し此佛に遇ひ奉らずは如何に久しく苦むだであらう、惱むだであろう、如何に墮落したかもしれぬ、如何に失敗したかもしれぬとは、慥かに信ずることである、「をの〳〵の昔は彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはしまし候ひしが、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをきゝはじめておはします身にて候なり、もとは無明の酒に醉ひふして、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒をのみこのみめしあふて候つるに、佛の御ちかひをきゝはじめしより、無明の醉もやう〳〵すこしづゝさめ、三毒をも、すこしづゝ、このまずして、阿彌陀佛のくすりを、つねにこのみめす身となりて、おはしましあふて候ぞかし」とは一言一句心に浸みて難有き敎である。

全体人間が眞面目に自己を省る心がなきときは、精神上の問題に向て入るべき門戸はない、そして、奥深く考ふれば考ふる程内心の穢はしく、底暗く、怒り安きことが分りてくる、抑々『汝自身を知れ』との古き敎を適切に味へは味ふ程、自己は立派でなきことが分かりてくる、佛陀が吾々の内心を解剖して貪欲、瞋恚、愚痴の三毒とせられたが、實に實驗上爭はれぬことである、我々は我々の本體が何んであるか、靈魂があるか、なきか、すべて分らぬが、唯自分が三毒の塊たることだけは明らかである、罪惡の塊であることは一點疑ふべき餘地を見出さない、佛敎は此根本に向て開かれたる門戸である、佛が布施即慈善の行を御勸めなさる、若し此價あるものを彼人の利益の爲めに與へるのであると思ふならば、何の爲めにもならぬ、唯之を吝氣もなく與へる心持がよいのである、故に布施の行をすれば貪欲の煩惱がなくなるのである、佛が忍辱即忍耐の行を御勸めなさる、自分は腹が立てども先つ人を恕してやるのであると思ふならば何の爲めにもならぬ、人を恕してやるのでない、腹立つことのつまらぬことを自覺する樣にならなければならぬ、故に忍辱の行をすれば瞋恚の煩惱がなくなるのである、佛が善を爲せと敎へらるゝ、善其物に執着してはいかぬ、善を爲すは吾々の心の無明をなくする爲めである、八萬四千の門戸の開かれたは八萬四千の煩惱があるからである、門を叩かぬものには開かれぬ、自己が煩惱の塊であることを自覺せぬものには。救濟の門戸は永久に鎖されてある。

親鸞聖人は實に此人間の弱點を自覺せられたる方である、

「一切の凡小一切時中に貪愛の心つねによく善心をけがし、瞋惱の心つねによく法財をやく、急作急修して、頭燃を拂ふが如くすれども、すべて雜毒雜修の善となづく、また虛假諂僞の行となづく、眞實の業となづけざるなり」とは實に氣持の惡しき迄、我々の弱點を看破せられた樣に感ずる。平生心を淸淨に持ちたい、人の爲めになることは少しも吝氣なく盡したいとは思ふてはいるものゝ、兎角、穢き心が起り、知らず識らずの間に、骨吝みをしたり、氣が附かぬ間に自分と云ふ考が雜り安い、又平生なるべく、少しでも善きことをしたいと心掛け、人に對しても頗る滿足な心持になつて、坐ろに佛の惠みを喜びて居るの下に、突然として怒の心を起して、今迄積むだ功德の法財を一時に燒き滅して、後から考へてみて、自らあきるゝことがある、どれ程我慢をして頭に火が附きた樣につとめたところで、純粹な眞實の心になられぬ、雜りものである。毒だらけである、結局虛假である、諂僞である人間の力で眞實などは迚ても迚ても及ばぬ、善らしきものは、善を飾りた僞善である、兎角、人間が我は善人であるとか、淸淨であるとか思ふべきでない、一枚皮をめくれば、腹の中は、穢はしき、汚き、黑き、怖るべきものが、大騷動をして居るのではないか、「外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ、中に虛假を懷けばなり、貪瞋、邪僞、奸詐百端にして、惡性やめがたし、事蛇蝎に同じ」とは吾々に對する骨身に徹

する打擊である。

此まで推しつまりてくれば、佛にすがるより外はない、唯佛の眞實を仰ぐより外はない、所謂「一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、穢惡汚染にして、清淨の心なし、虛假諂僞にして眞實の心なし、こゝをもて、如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫におきて、菩薩の行を行したまひし時、三業の所修、一念一刹那も、清淨ならざることなし、眞心ならざることなし」である、實に此が佛の佛たる點である、經文には此佛の眞實をあらはして欲覺瞋覺害覺を生せず、欲想瞋想害想を起さず」とあるが、實に我々が弱點の根本たる三毒の正反對に立て、清淨の行を以て酬ひて下さるのである、我々は兎角慾心が起り勝ちであるのに佛は少欲知足である、我々は眼に角を立て安いのに佛は和顏愛語である、我々は粗言を吐きて自ら害し、彼を害し、彼も此も共に害しつゝあるのに、佛は善語を下し玉ひて自ら利し、人をも利し、人も我に倶に利することを修習し玉ひたのである、我々が三業に於ける弱點たる病に對して佛は恰も適當なる藥である、吾々は此佛の眞實なる藥を用ゐるより外に仕方はない、「一切の衆生の身口意業の所修の解行、必ず、眞實心の中に作し玉ひしを須ゐよ」とは實に吾々が救濟の極所である。此に至りて前に云ひたる如く無明の醉もやう〳〵にしこしづゝさめ、三毒をも、すこしづゝ好まずして、阿彌陀佛の藥をつねに好みめす身にして貰ふたのである、此に至りて一點の私はない、全く佛陀の眞實が我々の胸の中に宿りて下されて、言ふに言はれぬ樂の境界である。

かくなりたる已上は吾人は滿身感謝の情に滿たされつゝ、出來得るかぎりは、身も心も謹み、出來得る限りは佛陀の慈悲を傳へ、佛陀の御心が世の中にあらはるゝ樣に勉めねばならぬ、なるべく慈善もなすべきである、經營もなすべきである、一分だけでも行ふのが報謝である、一歩々々謹むのが修養である、一刻々々佛の眞實を銳として我々の罪惡を懺悔すべきである、少々、長けれど親鸞聖人の誡を引きて我々の座右に具へよう、曰く「煩惱具足の身なればとて、心に任せて身にもすまじきことをも許し、口にも言ふまじきことをも許し、心に思ふまじきことをも許して、いかにも心の儘にてあるべしと申しあふて候らうこそ、返す〳〵不便に覺え候へ。醉も醒めぬさきに、なを酒をすゝめ、毒も消えやらぬに、いよ〳〵毒をすゝめんが如し。藥あり、毒をこのめと候らんことはあるべくも候はずとこそ覺え候。佛の銘名をも聞き、念佛を申し、久しくなりておはしまさん人々は、此世の惡しきことを厭ふしるし、此身の惡しきをは厭ひ捨てんと覺ぼしめすしるしも候べしとこそ覺へ候へ。はじめて佛の誓をきゝはじむる人々の、我身のわろく心のわろきを思ひ知りて、この身のやうにては、いかで往生せんずるといふ人にこと、煩惱具足

したる身なれば、わがこゝろの善惡をば沙汰せず、迎へ玉ふぞとは申候へ。かく聞きて後、佛を信せんと思ふ心深くなりぬるには、まことに此身を厭ひ、流轉せんことをもかなしみて、深く誓をも信じ、阿彌陀佛をも好み申しなんとする人は、もつとも心の儘にて、惡事をもふるまいなんとせしかども、今は左樣の心を捨てんと思ぼしめし合はせ玉はゞこそ、世を厭ふしるしにても候はめ、未た往生の信心は釋迦彌陀の御勸によりて、起るとこそ見ゆ候へば、さりともまことの心起らせ玉ひなんには、いかでか、昔の御心のまゝにて候べき」と、佛のまことの心の宿りたる聖人の人格と信仰とがあり〳〵とあらはれて、實に渴仰に堪へられぬ。

雜録

元照律師の西方願生

齋藤唯信

近頃諸種の經籍を見ました中に、私をして最も深き感想を起さしめたものは、左の偈文であります。玆に掲げて更に味ふて見ませう。

聽教參禪逐外尋。未曾廻首一沈吟。眼光將落前程暗。始信平生錯用心。

文字は僅に二十八字でありますけれども、意は則ち深長にして無量の妙味が含んで居らるゝやうである。此は親鸞聖人のよく引用なさる樂邦文類の中に出で居りますが、そして誰れの偈であるかと云ふに。元照律師の作られたるもので、是をば勸修淨業の偈と申して居ります。今少しく此偈文の意を考へて見るに、第一句、聽教參禪逐外尋とあるは、經卷をきゝ參禪もして、色々とそれからそれへと外を尋ねて研究をしたと云ふ事である。第二句の未曾廻首一沈吟とは色々の學問をなし研究をしたけれども、さて回顧一番生死問題の爲めに精神を傾けて沈吟した事が曾てないと云ふ意である。第三句眼光將落とあるは一死既に近き來りて眼光朦朧として少しも物色を辨ぜざるを云ふ。下の前程暗とは死の大問題が眼前に迫り來れども、前途茫々として更に趣向する所を知らず、所謂精神の定まらざる事である。第四句、始信平生錯用心とは結末であつて、此一句千鈞の力ありとても申ませう。多年の間學問や研究を積かさねても、修養の工夫に至りては何等の得る所なく、まして生死の一大事に臨みては趣向する處を知らず。今や迷夢頓に覺め來りて始めて平生の心懸が大謬見であつたことを悟りたので、謂はゞ暗路を獨り彷徨して居つたものが、始めて一點の光明を見た處を云ひあらはしたも

のてあらう。之を味ふの深きに從てます〳〵眞味の泉が湧き出づる心地がせらる。之を喝破した所の元照律師は如何なる經歷の人であつたか、其一代の行蹟如何を少しく述べて見たいと思ふ。

元照律師は幼少の頃より戒律を學び、天台の教觀を究め、且つ廣く諸宗の教義を窺ひ、律を以て自身の根本義とせられ。そして唐朝の道仙律師のかゝれたる、律の三大部たる戒疎、業疎、行事鈔によりて註解又は著述をせられ、所謂律宗に於ける大德であつた。而るに何故に斯まで學問もあり、德の高き人が自身の凡て取りて來た進路が迷妄である、苦痛であつた事を、此四句二十八字の偈文に述懷せられたかと云ふに。此事について佛祖通載や、佛祖統記を檢べて見ましたけれども遂に見當らなかつた。然るに元照律師の自身にかゝれた、淨業禮懺儀の序文を見て私は始めて律師が求道の切實なるを感じ、翻然として從來の志を變じて、西方願生の大誓願を起された因緣を知るとを得たのである。

それはどう云ふ事柄であるかと云ふに、元照律師は前述の通り、最初戒律を修し天台を學びし人であるから、律師自ら思ふには。この娑婆の五濁惡世に生れて惡を作して無量永劫の苦を受くるもの甚た多い。吾れ願くは佛教の深奥を究めて大導師となり、廣く群生を提誘し以て佛道に入らしめんと云ふ大志を起したのである。唯々衆生救濟の事のみに馳せて、自身の精神の何れに歸趣するとには心を留める遑なかつた。殊に高僧傳を繙きて淨土は洵に結構であるがこれ吾所願あにらず。若し吾をして猥に極樂に生れて樂を恣まもにせば、吾れ何を以て久しく三塗の苦難に沈める一切衆生を救濟するを得んやとて、淨土の法門に向て誹謗せられた、慧布法師の言を讀むに及んで。益々平生の持說を堅うし、後ち淨土門を窺ふと多年てあつたけれども、更に歸向するところなく益々輕謗の念を起したのである。然るに突然として身は大患に罹り、次第に氣力疲羸し來りて神識迷茫今や眼光將に落ちんとして吾は何處に往き何處に去るべきか、更に趣向する處を知らず、一大苦悶に陷るたのである。既にして病頓に癒え、始めて前非を覺り、悲泣感傷して止む所を知らず、自ら耻ぢ自ら悔ゐて且つ思へらく、志徒に大にして吾力の供はらざるとをつく〳〵思ひぬ。既にして天台の十疑論を讀み、須らく佛と共に離るべからざるの句を想起して益々恨悔の念を深くし。於是乎、平生學ぶ所を放棄して、專心一意淨土の法門を尋ること二十餘年、西方願生の念始めて成り、精神の踏みゆく足場が定まつたのである。これが元照律師の重もなる經歷である。此經歷を閲して前の偈文と照合すれば洵に其意味が明瞭に吾々の心に泌み渡る樣てある。いふ迄もない、禪を學び天台を修し、色々の學問を研究して如何程道理や理論に長しても、精神の安住する場所が定まらざる以上は、百千の經論註釋を讀む

ても何の所詮なさとを喝破せられたる、內的實驗の叫び聲てある。眼光將落前程暗との一句、生死の大問題に逢着したる人にあらざれば、到底云ひあらはすことの出來ざるものてある。

今の人稍もすれば哲學に往き、禪にゆき、此處に馳せ、彼處に求め。色々と外を尋ねて研究するもの多いが。只之を一個の深邃なる學理として研尋するのみであつて、之を吾身に行ひ吾心に收めて以て心靈上の糧食とし、前程の光明となすもの極めて尠ない。元照律師の所謂聽教參禪の輩のみ斗りで、洵に慨けかはしき次第てある。若し一たび元照律師の經驗に想ひ至らば、必ずや、劇然として死生の問題が胸中に湧起し求道の念抑へんとしても抑ゆると能はざるに至るてあらふ。事柄は陳腐てあるけれども、現時の佛教者に取りては亦以て反省するに足ると思ふて、敢て一言を費した次第てある。

（劍虹記）

因敬生信

百目木劍虹

曾て近思錄を讀みし時、其事柄に就て心に留めざりしが、何となく折々思ひ出されて「自分を教訓するやうの心地がした。外の人が讀むたならば恐く一顧の價もなからふ。それはどういふ事柄てあつたかといふに、伯淳といふ人が倉中に問坐して長廊の柱を見て、ふと之を數へて見ようといふ念が起つて來て、其意を以て數へたとあるが、即ち目算したのてあらふ。初めはたしかに正鵠を得たものと信じて疑はなかつた。處がどうかしらんと云ふ氣持になつて、再び目算して見たが、最初の計算と其數に於て差異が生じて來た、この度は態と人をして一々聲言して之を數へさした。果して初めの計算と少しも差異がなかつたと云ふ事を確めた。事柄は平凡にして之を特にいふべき必要ないが、何事でも信ずることの難いのが是によりても證明せらる。何故か吾々には人を疑ふ心がありて何事に拘らず、一言の下に左顧右眄せず、直に之を信ぜんとしても、どうしても之を信ずることが出來ぬない。自ら計量して人の心を疑ひ、人の行ひを疑ひ、遂に自分に對して彼は敵意を挿はさむてはないかと思ふて、ろれからそれへと曲れる尺を以て量るものであるから、正しい計量の出てくる筈がない、疑の地層は僝結して信の清泉は容易に湧き出てこない。古人の句に白首相知猶按劍の語あるが、よくも吾々の眞相を說破したものてある。お互に五十年或は六十年も白髮になるまて交際して、胸襟をひらいて親密にして來た中でも、時としては根も葉もないことより、腹を立てゝ猶劍を按して睨み合ひすることないとも限らぬ。洵に信ずると云ふことの難いのが、泰山を挾んで北海を越ゆるの比てはない。

信と不信とによりて、平和の社會が現出せらるゝか、暗黑の世界と化し去るかの境界線である。互に信じて居れば劍を按ずるにも及ばぬ、一家は熙々として風波の起るものではない。子は親を疑ひ、妻は夫を疑ふやうては、平和の光明は俄に消えて進路が塞がるやうなものである。よし一たひは信じても長廊の柱を數へた人の如く再び之を疑ふやうでは、何の所詮もなき次第である。信ずると云ふことは始より終に至るまて一貫して動かず、變ぜざることである。たとへ他人は自身を疑ふても、そは自分が誤解せられたのであるから、いつかは氷解するの時が來るである、決して自分は他人を疑ふものではない。自分が疑はれても自分が眞實であるならば、恰ど黃金のやうなもので、一旦は地中に埋れても其まばゆき所の光りを長へに失ふものではない。

むかし戰國時代にありてはよく人心を收攬するを以て本務としたものであるが。人心を收攬するとは權謀のやうに聞こゆるが、一面より考ふれば、一髮を容るゝの餘地なく其人を信ずることである。信ぜらるゝ故に勞ひ又信を起さゞるを得んのである。恰も磁氣が鉄を引き寄せるやうのものであらふ。士は己を知るものゝ爲めに死すと云ふことかあるが、己を知るとは信ぜらるゝことで、信ぜらるゝゆゑ實際虛泣せずに居られない、一身を何の惜げもなく其人の爲めに捧げることになる。此に至りて信ずるとの大なる、吾々の力にては之を測り知るとが出來ないのである。

然らば信ずるとは如何なる心持であるかといふに、何の事はない、打ち任すのである。其人の學問や、智識を詮索するに及ばんのである。詮索するやうでは打ち任したではない、即ち信じたとは云へない、吾々が佛を信ずるも其通りである。こうしたら救はれやうか、あゝしたら助けられやうかの考を以てしては佛の力を信じたとは云へない。宗教は科學でなければならむ。哲學でなければならむ、合理的でなければならむやうでは。また〳〵、佛を遠い〳〵處に見て居るので、未た大牢の美味を味ふたとのないものである。

吾々は如何にして佛を信ずるかといふとは、多くの人よりきく所であるが。其人によりて東よりするもの、西よりするもの、將た南より、北よりするものありて、何れを何れと定めがたい。ある者の如きは、叩けよさらば開かれんとて、たた熱心になれ、眞面目になれとすゝむるが、ろれはそれに相違ないが。たゞむやみ矢鱈に狂氣の如く熱心になり眞面目であつた所が、路に落ちて居る石塊を拾ふやうに無雜作に得られるものではない。またある者の如きは頻りに念佛をすゝめらるゝが、たゝ稱名によりて信仰を得らるゝならば、何人が好んで地獄に趣くべきぞ。余は於是乎、つら〳〵想ひ起したのは、東坡居士のいはれた敬に因りて悟を生ずとの詞である。流石に一代の文豪にして、而も深く禪味を味ふたる東坡居士の語である。禪よりいへば悟を生ずるであるが、吾等の立場よりすれば、敬に因りて信が生ずるのである。敬意が起らざれば佛前に向ても長跪合掌の念も起らざるべく、從て佛を信ずる心も起らむのである。乃ち熱心に眞面目に敬虔の情を以て佛の慈悲に賴るの外ないのである。

手に珠數を持て佛前に禮拜す、正に是れ敬虔の情の發洩する所、決して無用の事ではない。若しそれ信仰の關門堅うして開かれざる時は、退いて靜に敬虔の心を起すがよい。關門自ら開いて吾等を其堂奥に導くであらふ。吾等は敬により て信を生ずることは毫も疑はない。

人を信するにせよ、先づ敬意がなくては信ぜられるものではない。吾等は偉人の肖像を其書齋に掲け置くも、此意に外ならむのである。まして、希望を興へ、光明を興へ、安慰を興へ、常住を興ふる、佛の威神力に對して、吾等いかで滿身敬虔の念を捧げずしておられやうや。故に信仰を求めんとせば先づ心の奥底より敬虔の念を喚び起さねばならぬ。必ず敬によりて信は生ずるのである。聖德太子の篤く三寶を敬すべしと云はれたのも、全く此理りであらふ。

錫蘭佛跡

松本文三郎

錫蘭には到處佛跡が多いが、先づ少しく其因緣を話しませう。錫蘭島の古史によれば、佛自ら錫蘭島へ幾度となく渡られたと云ふ事である。佛はランカ即ち錫蘭島は後來必ず佛敎隆盛の地であることを詮顯せられて、是まで錫蘭島に住んで居られた所の惡魔を退治する必要を感ぜられた。そこで印度よりして錫蘭島へ渡りてそこに住して居る夜叉即ち野蠻人に向て速に土地を明け渡すべしと命じた。夜叉は止むを得ず一時全島を見棄てゝ退去することを約束しました。佛は空中より敷物を張りて地面へ落されたが、其敷物より焔が燃え上り炎々として益々ひろまりゆき、夜叉は爲めに海岸の方へ追ひ詰られ、遂に島を引き拂ふて海を渡りて他へ逃げ去りたと云ふことである。之が第一の錫蘭島へ渡られた因緣である。

其次に渡られた時はナーガ即ち龍種族を退治せられたことである。佛が龍種族を打ち平げて、空中に上りて正さに錫蘭島へ去らむとするにあたり、スマナ山即ち今のアダムス、ピーキの山上に足を留めたと云ふ傳說がある。今日に至るまで多くの信者が危險を冒して參拜するは之が爲めである。此等の傳說は勿論後世の牽强附會であつて少しも信用が出來ぬ。

錫蘭島の佛教遺跡の中で最も重もなるものは古の都であつた、アヌラドハプーラである。此のアヌラドハプーラは今の都カンデより八十四哩北方にあたる所である。而して其遺跡を述ぶる前に八哩東方にあたるミヒンターレに就て話さうと思ふ。

抑々ミヒンターレと云ふ所は佛教遺跡として最も有名なるもので、凡ての佛教者殊に南方佛教者に取りては忘るべからざる土地である。錫蘭島へ佛教の傳播したは此地方であつて、錫蘭佛教の中心點となる處である。マハパンサーの記事によれば、アソカ王の子マヒンダーが錫蘭へ來りて當時の島王たるチッサーと始めて會見したのが、此のミヒンターレと云ふ山の上であつた。而してマヒンダーが、何れの地方より錫蘭島へ上陸した事は、今に於て不明である。兎に角錫蘭の北方の港より上陸した事であらふと思はる。其時チッサー王は狩をなして其山の上に來て居つたので、素より佛僧を知る筈がない、黄衣を着して居るのを見て大に驚かれた、マヒンダー王子は直に進んで王に謂ふて曰く、吾はこれ僧侶である。慈悲を行はん爲めに態々茲に來たのであると、チッサー王はこれより以前アソカ王の使者の事を想ひ起して、此人が即ち佛の弟子であつて、佛の法を廣めん爲めに來た事を考へて、手に持つた弓矢をなげすてゝマヒンダーと親しく物語りせられた。それからマヒンダーの話をきいて非常に喜んで俄に歸依し、自ら歸依したのみならず、王妃並に宮人及び國民一般に至るまで皆佛教に歸し、錫蘭佛教は茲に其端緒を開くことを得たのである。此の會見の場所は即ちミヒンターレである。アヌラトハプーラよりミヒンターレに到る平原の路を通して終に百七十五間の高さに達する山が即ちミヒンターレである。山麓より山頂に至るまで欝蒼たる深林を以て蔽はれ、其間の通路は花崗石を以て畳みたる大階段を作つて頂上に達して居る。其階段の路は山の東の方で一番緩やかな處である。山の南方は懸崖絶壁である。山頂の東北にあたりて大なる塔がある、エトベーヘラ、ダゴバと名く、少し遠方より之を見ると殆ど自然石で作られたやうである。近いて委しく研究し見ると煉瓦を以て畳み上たもので、其數幾萬であるか數へることが出來ぬ。今は僅に其形跡が存して居るのみである。其側に今一層大なる塔がある、マハセーヤ塔と名く。路は非常に險阻である、そこに上ると古の都のアヌルダプラの傳道の跡を一目するとが出來る、深林を隔てゝ海邊の景が歴々として眺望を恣にすることが出來る、チッサー王とマヒンダー王子と會見した處に紀念として頗る立派なるビハーラ精舎が建られ澤山の僧房が附屬して居る。錫蘭の僧房は凡て印度に近似し極めて單純で、たゞ自然石を横に穿ちて住家となした位の事で何等の見るべき裝飾がない。そして花崗石の堅い壁の上に僧侶を訓誡したる言葉が彫り付られてある。非常に興味のある訓

誡て、之を一讀して當時の僧侶の狀態があり〳〵と想ひ浮べることが出來る。其文字は消え去りて讀み得ないものが澤山あるが、今日讀み得らるゝ個條は大略左の如きである。

（一）何人と雖も、如何なる方法に於てするとも、生物を殺すものは此山の周圍に住することが許さない。（二）特別なる事業は設けられて居るゆゑ、奴隷又は勞働者によりて之をなさねばならぬ。（三）勘定は精密に支拂ふ事。（四）僧侶の集會席上に於ては精密に調査すること。（五）一定の金額は寺院に住して居る人に對しては、花を購求する目的の爲めに與へらる、故に如何なる人と雖、佛に供へるものなしに來てはならぬ。（六）特別の僧房は讀經又は講義する所となし、僧侶の住家としては他に場所を定めて居る。（七）朝起の時間、禪床の時間、沐浴の時間等は精密に規定せられてある。事である。

以上は大略に過きないが、猶ほ外に注意すべきは病者に對して食物は殊に注意すべき事を命じ、下僕、番人、集金人、書記、監督者、醫者、洗濯屋等の凡ての者に向ての注意が記錄せられてある。これによりて見ると當時ミヒンターレの山上には、澤山の人が住してゐつた事が想像され、日々の行事に向て精密なる規定あるを見ては、實に驚くべき秩序と整頓を保つてあつた事も略推察が出來る。又此山に於て著しきものはナーガボクナ即ち龍の浴場と名け、僧侶の沐浴した跡か存して居ることである。此浴場は大なる懸崖の石の下にありて、長さ殆と二十間以上である。崖の下邊に大なる龍即ちコブラを彫刻してある。またマヒンダーの遺骨を納めたる塔あるが、之をアンアステレー塔と名く。マヒンダーは此處に於て死したので、其塔のある處は丁度入滅の場所なりと傳へて居る。塔の周圍には五重の八角形の柱が立つて居る。險阻なる巖の路を通りて進みつゝゆくと大なる塔の傍にマヒンダ王子の寢床と名けられたものがある、乃ち大石の下方を斜に穿ちて、六尺位の平面となし巾は三尺にも足らぬ處てある。一寸見ると休憩所とより思はれない。誠に危險な心持がする。乍併マヒンダ王子は此處を愛せられたと云ふ事てある。それは山の絶頂にありて眼光豁達眺望がよいからであらふ。思ふに王子も世の塵俗をすてゝかゝる山中のわび住ひであつたから、自然界の美を眺めて其心を淨められたかもしれぬ。もう一つこの處て注意して置きたいのは此山の飲量水の事である、飲量水を貯ふる爲めに大なる石の箱を用意してある。前に述べた龍の浴場の下方にある、其一部は雨水と一部は清水であると云ふ事である。箱に入れるに當り古しは水こしを附して箱の中へ落つるやうにしたそうである。今は其水こしは取れてありませぬが。紀元前三世紀の古代にありて、如此注意の周到なる。實に後世の人をして驚嘆に堪えざらしむる次第である。

（百目木雄記）

支那の骨相說と刑事人類字

（婦人犯罪論ノ一節）

本多澄雲

余頃日偶〻人相水鏡集約篇と題する支那の骨相說に關する書籍を讀み、其論往々彼のロンブロゾー氏等一派の唱ふる「クリミナル、アンスロポロジー」（刑事人類字）の所說に暗合する者あるを發見し、頗る興味を感じたりき。

元來觀相術なる者は歐洲に於ても古代より行はれたりと聞きしか、今其詳細を悉くすを得ず、十九世紀の初葉に至り獨逸にガールドと稱する醫師ありて骨相學を唱ひ、次て英國にスブルッハイムなる人起りて大に之に和し、門人ジョーンコムブ氏の如きは其說を祖述して、骨相學に關する數多の著書を出し、一時の勢力歐米諸國到處に熾んなりしか、今は領域次第に縮少して孤域落日の有樣を呈し、僅かに米國にフホウラー氏兄弟ありて舊觀に挽回せんと汲々たる而已、復た昔時の盛を見る能はさるに至れりと云ふ。

其說によれは精神の活動は各特別の中樞を有する者とし、頭蓋或部の突起は之に相應する精神機能の發達を表示する者なるが故に、此形狀を見て其性質を推測し得へしとなせり、而して其精神活動の分類をガール氏は二十六種とし、スブルッハイム氏は三十五種とし、フホウラー氏は更に加へて四十三種とせり。

所論の是非は茲に精評するの遑なしと雖、其說多くの學者間には未た重要視せらるゝに至らす、畢竟漫然たる空想たるを免れさるか故ならん、宜矣勢力の年々に減退して領域の月々に縮少するや、況んや支那の骨相說の如きは固より科學的研究を經たるにあらず、又統計的根據を有するにもあらざれば悉く信を措くに足らざるは勿論なれども、間々經驗派の所說と相類する者あるは奇なりと謂つ可し、且く其最なる者五三を對照して犯罪研究の參考となす、豈無用の閑事なりとせんや。

刑事人類學の鼻祖とも稱すべきロンブロゾー氏は、曾て犯罪者の具有する骨格性質を論じて二十六種の異點を列擧したりしが、其中耳朶の變形を論じて『急須の手の如し』と喩へたり、人相水鏡集約篇に耳を論ずる條下を見るに亦た、

上尖如レ狼心多好レ殺下尖無レ色亦非二良善一

の言あり、其形狀を論ずる必らずしも相同じからずと雖、耳形如何を以て善惡兩相ありとなすに至りては則ち一なり。

次にロンブロゾー氏は尙ほ『頭蓋の容量狹少なること』『鼻は扁曲し若くは圓平なること』『頰骨高きこと』の三異點を

數へられたるが、水鏡集約篇亦た腦を論じては、

天庭平滿定家豊天削者刑傷地削者貧夭

と云ひ鼻を論じては、

準頭尖曲爲レ人好レ奸山根低陷先敗二祖業一準頭掀露老見二孤單一

と判し、顴を論じては、

顴高顴削作レ事難レ明

又たは

女人顴高必奪二夫權一顴高如レ峰破二殺三夫一

と斷せり、嗚呼兩說の相肖たる何ぞ此の如く酷しきや、

ロンブロゾー氏又曰く『犯罪者は眼窠大にして白痴者の眼に似たり』と、近頃又露國の一碩儒エムカルローフ氏は更に進んで其色を研究し、人命犯及び强盜犯の者は赤鳶色にして、竊盜犯及び乞丐者は輝ける青色なり、而して正直なる者は黑鼠色若くは青色なりと云へり、水鏡集約篇は未だ其色に及ぶの詳細はなしと雖、眼窠の巨大なるを以て不祥の表相となすは則ち同し、其說に曰く。

目大昏沈天二死波津一

又た曰く

大眼昏沈錢財耗散

ロンブロゾー氏又曰く『犯罪者は鬚髯稀少若くは皆無なるも、頭髮は多く婦人は却て鬚髯多し』とアントニオ、マロ氏（伊太利チウリン府の監獄醫）の調査によれば、百人の犯罪者中一三、九は全く無髯なることを發見せしが、通常人には只百に對する一、五にすぎざりしと云へり、而して罪人相貌學の著者は頭髮に關して左の言をなせり

婦人にして殺人罪を犯したる者の中には髮の生際より太た濃き漆黑の髮を生ずるもの多し、

希臘の古代にも、

髯のなき男子と髯のある婦人に途中にて遭へば遠く之を避けざる可からず、

との俚諺ありしと聞く、之を彼の水鏡集約篇の、

重髮無レ髭不レ可二同侶一

の戒に對照すれは全く符節を合するか如し、以て無髯の如何に危險なる人物なるやを察すへし。

尙ほ犯罪者の頭蓋中額弦及ひ眉弓の隆起を有する者ロンブロゾー氏によれは百中六十六、九にして、ボルデエ氏によれは百中六十なり、又マロ氏に從へは同百中二十三にして通常人には百中十八を發見せりと證明せり、（伊太利ナーブル大學教頭ガロフハロ氏の犯罪論）是れ亦た水鏡集約篇に其說あり。

眉骨稜起者兇惡

余や羈旅の客にして固より鄙架に乏しきか故に數多の書籍を通覽して、詳細なる比較研究を試むる能はすと雖、以上の對照にて粗ほ一端を領するに難からさるへし。

そも〳〵刑事人類學なる者は世人の已に知れるか如く、ロンブロゾー氏を始めとし、英國にありてはモーズリー氏佛國にありてはデスピーヲ氏伊國にありてはガロフハロ氏等盛んに之を唱道し、歐米諸國到處に覃及し將に一大勢力とならんとするの觀あるも、一方には之れに反對する學者も亦た尠なからず、例へはロンブロゾー氏は犯罪者の身長は通常人に優ると唱ふれは、ウヰルリン、ソンブリン氏の如きは却て反對の事實ありと叫び、甚きには英國のサー、ロバート、アンダーソン氏と獨逸のマックス、ノルドー博士との間に犯罪と遺傳に關する一大論戰あり、ノルドー博士ハロンブロゾー派の學說を奉する人にして、犯罪遺傳論を主張したりしかロバート氏は大ひに之を辯難し、且つ僧正の寫眞一枚と强盜の寫眞一枚を出して其孰れか犯罪者なるかを指示せよと迫りたるも遂に應答すること能はさりしとの失敗談あり、ドールドソンルーチニー諸氏もベネディクト氏の習慣犯者の頭腦の組織は通常人に比すれは一種の畸形を有し充分に活動する能はすと云ふに首肯せず、且つ自信を述べて。

予は予自身斯く信せり、習慣性犯罪者か或特種の腦組織を有せりと云ふか如きは、唯多數の事例を集めて其結果を大体より觀察したるに止り、決して或者に對し或特別の腦組織を有せりとの必要的關係より生したる者にあらす、

と斷言せり、殊に近頃ドクトル、オースチン、フリント氏か紐育法醫學會にてなせし一大演說の如きは、考證該博議論明快彼のロンブロゾー派の新學說を根抵より破壞し去れりと稱せらる。

此の如く純理派と云ひ、經驗派と云ひ、蘭菊美を競ひ何れも一分の眞理を有し、容易に輕重する能はす、尙仮精密に愼重に研鑽を要す可き者たるは勿論なり、例へは神經系統の發達不完全なるは隨て精神機能に多大の障害を受け犯罪の機に接觸し易からしむるは事實なりとするも婦人にして鬚髯を有し若くは男相を具ふる者、果して犯罪的の身体組織なるか不審し余は此點に就て寧ろ五雜組に、

九眞女子趙嫗乳長數尺馮寶妻洗氏亦長二尺暑熱則擔二於肩一李光弼之母鬚數十根皆異表也而或立二殊勛一或止作レ賊在二其人一爾宋徽宗時有二酒保婦朱氏一四十生レ鬚三寸許又勛陽一婦美色生レ鬚三綹約數十莖而皆無二它異一

と記せる者蓋し千古不磨の鐵案なりと信す。

余は因みに婦人の異相に關し二三の事例を擧くるに、近頃ブルークリンにて死去せるパーナムの見世物に有名なりし髯女は米國ヴエージニア州スミツスに生と、十五歲の時より諸國を巡業し露國伊國等の君主に謁見を許され、二回の結婚をなし每週一千弗の給料を受けたる者なりしと云へり。

劇談錄によれは張秀弘なる者逆旅に於て一婦人の指を以て戲れに石に劃するに其指の入ること二三寸ばかりなるを見たりと云ひ、又唐の德宗の時三原の王大孃と云へる女子己れか首を以て十八人の樂人を載せて舞ひたりとあり、

吾國にては延寶年間に近江より來れる於與米と云ふ者身長七尺三寸あり、其夫なりとて甫春と云ふ侏儒と共に乘庶の觀に供したりと用捨箱にみへ、文化年間に品川驛鶴屋の娼婦都多年二十二にして其衣所謂對丈を以て之を量るに長さ六尺七寸あり、駿河國府中の人なり、後澱瀧と改め大女の力持と稱し、棋局を以て燭火を滅し筆を四斗苞に結びて書を作り、是れ亦た乘庶の觀に供したること武江年表に詳かなり。

此の如き異相を數ふるは東西古今に乏しからすと雖、是等は悉く犯罪者のみと限られたるに非す。去れは其犯罪に陷ると否とは只人物の如何に存する而已、謝肇制の言豈吾人を欺んや。

開く哲學者ソクラテース氏は自ら觀相術に長し、常に『余の骨格は犯罪者なり』と云ひしか或人彼れを相して『此人は危險なる人なり』と云はれたるに應へて『然り若し余自ら余の心を制する能はすんは、全く犯罪者たるを免れさるへし』と斷言せりと、武士訓にも亦た曰く。

人を撰ふにかたちを以て定むへからす、他の言葉を以て極むべからす、みづから交りしたしみて後ならではその人の心知れさるものなり、むかし孔子の匡をすき給ふとき、孔子のかたちよく陽虎に似たまひしかば、匡人陽虎なりと思ひとらへて五日置きたりとかや、孔子は聖人なり、陽虎は惡人なり、然れとも其貌ひとしけれは誤つところ此の如し、又澹臺滅明字は子羽といふ貌はなはた見にくし孔子見給ひて彼は才うすしとをぼせしか業をうけて後名諸侯にふるへり、これによりて孔子われ言を以て人を取るこれを宰我に失す、貌を以て人を取るこれを子羽に失すとの玉へり、人を知る事たやすからんや、

去れは犯罪の如何は偏へに相貌のみにて斷す可からさるは愈々明白なりと謂ふ可し、然れとも若し此例の多くは和漢の事實に係るを以て東西人種を異にし骨格亦た同しからされは、一概に此を以て彼れを律す可からすと云はゝ、今後日本に於て更に新研究を加へ日本的刑事人類學を大成し、斯界の爲に貢獻すへきは正に監獄官吏は勿論法學者、醫學者、宗敎家、敎育家、又たは社會改良家等の雙肩に擔へる一大責任にあらすや、犯罪者の研究豈等閑に付す可けんや。

心定者其言重以舒、不レ定者其言輕以疾。
戲謔不二惟害一レ事、志亦爲二氣所一レ流、不二戲謔一亦是
持氣之一端。　(近思錄)

雜吟

名月やよべに比すれば雲多し　句佛

岡山後樂園三句

櫻落葉梅落葉萩さかりなり

秋晴や鶴に投げやる吉備團子

井田に周の世遠く秋悲し

初雁に障子張るかな里御坊

攝待や京の豪家の鯨幕

稻妻に水天彷彿と見ゆるかな

鹿のなく奈良は七草八重葎

晩望

滿籠の沙魚半船の斜日かな

虫鳴くや八瀨の小家の豆ランプ

松龍の如く蔦紅葉して炎の如し

ころ〳〵と砂のかぶさる松露かな

荻の風舟中に子の泣く聲す

墓詣裏門ぬけて歸りゆく

我れを厭ひ漁父の辭うたふ秋の暮

秋十句

吟二

床を出て燈明をけす夜長かな

朝寒の佐渡出る船や僧二人

借屋して髯の披露や今年酒

拂子ふる老僧の顏やうそ寒き

秋雨やひねもす籠り旅日記

立てかけし琴の切れたる夜寒哉

鳩吹くや朝の雲のさら〳〵と

髯蓄へ徒らに强し暮の秋

胡弓きゝ秋惜みけり山の宿

褌に偈を授けたり九月盡

秋三題

曉村

粟畑を山根へ上る烏網張

粟切や桑の木間に見ゆる家

粟切に一日は休む苧うみ哉

宵起の便所に遠き花火かな

河花火千羽鴉に宵更けぬ

遠花火聞いて見て居て氣とをさよ

江村の桑落莫と冬近し

土を鍊る鑄物師か庭冬近し

冬近く澁柿壺を封じけり

裏口の灰水幾日冬近し

冬を待つ洗足鉢も結びにけり

唐墨の値を市に問ふ冬近し

秋季雜詠

生巢

落し水紅葉うれしき畦の草

草の間に粟二つあるうれしさよ

山貸して栗三俵の貢かな

落栗や朝露しけき草の花

流れよるくされ瓢や秋の水

鬼灯の腹腸洗ふ秋の水

花火過きて山谷を戻す舟の數

舟に飛ぶ汀の虫や秋の水

ひなの女や機をるひまを鳴子引

秋の句

麻郷

紅葉や橋を渡りてお茶の水

青顏は赭顏に若かず烏瓜

烏瓜瘦屋のぞく垣越しに

腸の襤褸ゆかしき案山子かな

求道學舍六句

秋晴や富士見えそめて古櫚干

聽法や木犀の香もなつかしみ

聽法や白菊かざす人も見えて

夕陽や樓にせまりて薄紅葉

勤行の庵主が髯や冬近し

秋雨のかゝる佗しや古障子

燈影微吟（一）

雲低里人

妹とさゝげ摘み居れば裏山にはろ〳〵鳩のな

き出でにけり
み神ます空近しとふ秀つ峰にいのりし居れば
雲湧き起る
月の野に虫や取るらん人影の起居もゆらに風
吹き渡る
虫取りて來し兒等眠り其兒等の夢のにぎ床ゆ
らなく鈴虫
虫を聞く庭のまいるの篁のかなたの空に白き
雲見る
鳥籠に夕日のこりて草の庵の梅の落葉に時雨
そめけり

雫と海と

岡　しげる

一雫の露も月の光りに照さるれば、忽ちにして葉末に玲瓏たる眞玉を綴り。極みなき大和田つ海に、月影落つれば、忽ちにして金波銀波漂ふ。其纖麗此崇高元より趣きを異にすと雖とも、其月影を宿して、美はしき光を發つに於てや、何ぞ選ぶ所かあらん。葉末の露の徒らに大海たらんを羨望するも笑ふべく、大海雫を小として侮らば元より愚なり。況んやかの暗に埋もれて月影宿すべうもあらぬ汚れたる水の如きは、閃らめく露、輝く和田つ海を咒ふべき資だも備へざるものなり。

露は葉末にありて、風にも散らず、醜草にも蔽はれて、雫を擧げて月影を宿さば、露にありては最も美しきものならめ、露の光り何んぞ能く此の上に出でん。渺茫たる大海瑣雲に翳されず、穹窿の下に展らけ、滿面に月影溢れなば、海にとりてはこよなき眺めならめ。誰れか此の上に海の輝きを求めん。眞玉と閃めく露と、白金黄金の波布ける海と、予はより多くを期待せざるべし。又其二の孰れか優り、孰れか劣れりやのけぢめを附するの愚をなすを欲せざるべし。此露此海各々其偉大を現じたればなり。

予と人とは又露と海との如きか。予聖にして海たらば、月影あみて白金黄金の涙躍る美はしき海たらん。予若し一雫の露と凝らば葉末に安んじて眞玉と輝かん哉。

用近親常觀師聽予上五臺之話

原韻翻寄

菊池　耕雲

半夜剪燈語五臺。恍疑雨腋上崔嵬。華嚴懸記清涼地。萬里尋源獨徘徊。中殿叩磬拜眞像。金塔燦爛涌日來。東山排霧窮絶頂。北臺半麓起迅雷。回想少年行脚事。曾游如夢續快哉。

磬、金像、金塔、皆在平中臺、大文殊寺、及殊像寺中、

重疊前韻

同　人

杖錫人到自仙臺。梳風洗雨踐崔嵬。鵬程奮迅千萬里。歐山米水遠徘徊。到處開演廣長舌。至誠切々吐血來。曾記教界風濤惡。建法幢兮震法雷。草堂閑話今昔感。日夕披襟亦快哉。

鎌倉懷古

藤井無絃

放虎山兮豈無悔、宛似以鑰借盜兒、遺孤起身絶島裡、風靡扶桑果有期、堂々開得鎌倉府、宇内政權忽然歸、惜哉獨誤善後策、骨肉相食君臣離、奸臣忽博漁父利、更以暴威敵錦旗、榮華九世果何事、殲胡總得助天威、末葉忘却傳家訓、傲奢淫逸國本疲、大勢推移有如此、終以金湯附狐狸、我來偶宿寶戒寺、亂蟲荒月吊殘碑、腥風一陣吹毛髮、恍疑天狗掠人飛。

松聲

仙韵方傳縹渺聲、是簫是瑟聽來清、看他龍影上窓紙、始識老松吟月明。

夜讀

襟懷無復俗塵侵、亂帙孤燈伴夜深、万戸夢圓天地寂、一鈎仄月上東林。

◎正誤　前號木欄に收めたる、大塩藩勤王始末序文の下に南條博士とするは誤にて、野村藤陰氏の稿也。謹て粗漏を謝す。

新刊紹介

文學博士松本文三郎著

◎印度雜事　全　東京六盟館

題のつけ樣から、頗る賞撲にして面白い、内容も其如く頗る材料に富みて、從來一向不明なる印度の世界に向て大に光を與へられた次第である、全体印度の事は未だ纏つたものが出來ないので、殊に佛教者の如きは其材料が不足なるため、研究が行き屆かぬのであるが、著者は不言の間に其病根に向つて藥を與へらるゝものである、上篇は印度の文學史とも云ふべきもので印度研究者、政事、文學、科學、宗教、哲學、社會、美術、建築、工藝、現時の狀態の九篇に分ちて、著者が眞面目に研鑽せられたる材料を與へられた、下卷は印度に關する雜話を集められたものて趣味の多き說話の多い、殊に親しく印度の地を蹈査して調へられたる結果なれば、清新なる光明を印度研究者に與へらるゝ次第である、氏が最近刊の佛典結集と共に佛教者が必ず座右に供ふべき圖書にして、吾人は氏が忠實なる研究に向て大多の尊敬と感謝を表するものである、（定價九十錢）

嚴谷小波著

◎洋行土産　上下二册　東京博文館

表裝から頗る意氣を淡らした美本で、四洋最近式なる、ユングブルンテンの體裁に倣ひ、表紙には上卷にはヌボー式の流車を畫き、下卷には船を畫き、表紙裏に紋紙を附け、興味ある寫眞版を入れ、特に每頁の裝りに、桃栗三年やら、行雁やら、鴈雁やら入れたのは、流石に斯道の名家だけありて、其趣味の深き、輕妙にして、而も清新の氣の溢れてあるは、今まで見ざる小氣味のよい書物である、偖繙きて讀みて行くに、氏が手輕き筆を以て、よく實を寫してある、何氣なく一寸繙きてある間に、ツイ釣り込まれて徹卷してしまふ、といふ有樣である、西洋に行きたものは、再び彼地の事を追想するに宜しく、西洋に行かざるものは氏と同道して、連れて歩きて貰ふ氣持がする、何氣なく讀みてる中にワザとならぬ氏が

輕妙なる滑稽には獨り微笑を禁し得ないことがある、偖長々と三年ふりの洋行の後、新橋へついた所を畫きてあるところなぞは覺えず、同感の涙を注ぎた、特に此書の大に取るべき所は言ふべからざる家庭的の趣味の存する點である、話の材料よりは話しぶりに味がある、如何にも一家團欒の間に小波の伯父さんが西洋の面白い話をして呉れる氣持がする、うして其間に健全なる空氣と、清潔なる社交とを知らず識らずに了解せしむる樣になつてある、下卷の方は勿論若眼も筆法も大人向きになつてある、吾人は著者に向て此立派なる洋行土産を感謝する、（定價各册金一圓二十錢）

千野哲次著

◎自然之教訓　全　東京　光風館

著者は非常に信仰深き人にして、多年修養の功を積まれた次第である、而して其專門の學問たる博物學の研究の上より大に信念の養ふべきものあるを發見して之を著はされたのである、本誌にも其一部を拔萃してある樣に實に自然に對して深奥なる考察を下したものである、其最も多とすべき點は單に詩人的に自然を謳歌したのでなくて、科學的研究の事實の上に人世的宗教的觀察を下した點である、兎角、科學なるものは解剖的實驗的研究にのみ陷りて、人生問題と實驗して考へられない樣に思ふて居るが一般なるに、著者は此間より大に悟入されしは實に多く得がたき經驗である、嘗て志賀氏が地理學か詩的に描きて一時青年の心を牽きたことがあつたが、本書の如きは數歩奥深く入りたるもので人生、宗教の奥底にまで突ち入り、所謂天然の秘藏を闡きたものと云ふべきである、吾人は宗教者にも又教育者にも是非一讀を煩はしたき書物である紙質製本の美なるが上に挿畫に著色などありて大に意匠を凝してある、（定價六十錢）

大須賀秀道著

◎佛教讀本　全　京都　精道學舎

著者は眞宗京都中學の教授として、十二歳より十五歳まで位の生徒に向て授くる爲めに編纂されたものにして、釋尊及諸高僧の小傳を集めたものである、全体幼年の生徒に宗教を解得せしめむとするは至難の事である、しかるに現時佛教の諸學校にありては其點につきては頗る注意が不足にして、六ヶ敷きことをつめ込み主義に教へ樣とする故に、何の功もなきのみならず、動もすれば却て宗教の科目に趣味を見出さぬ樣になる、今日佛教家の教育に於て要とすべきは、なるべく健全にして、趣味のある滋養分を、消化し得べき分量だけ與へることである、著者の如きは此弊を認めて、先づ之が改良を試みられた人で、吾人は頗る多とするものである、殊に宗教は教理自身よりも人格の感化といふことが大切である、然るに從來佛教者は釋尊を始めとして古來の高僧の性格を味ふことを忘れて居る、然るに著者は平易なる筆を以て此を教へることに意を注がれたは大に結撰である、すべて各宗の高僧大德が紹介してある故に、佛教各宗中學の教科書に採用せられたらばよからうと思ふ、（定價四十錢）

文學博士南條文雄
文學博士高楠順次郎　述深井常四郎編

◎佛領印度支那　東京　文明堂

著者の緒言に曰く。佛領印度支那五州、即ち東京、安南、交趾、東甫寨、老撾は三種の言語、十餘の種族を包含し、曾て隻手萬機を支撐せし佛領土の三帝王、（安南成桑皇帝、東甫寨ノロドム王、老撾ダカリン王）は今尚虛器を擁してその國都に君臨し、萬春の遺芳を地下に埋め、空しく史上の夢と化したる日南の三文明（眞臘、占城、大越）は今や大に世界識者の眼底に映射する所あらむとせり、加るに佛人招賢經略の妙、能く五州の民を悅服せしめたるの治蹟を以てせり。是れ實に吾人の親探踏査を値する所以にして、又本書の刊行を思立ちたる所以なり、と。昨年河内府に於て萬國東洋學會の開からるるや、我國より南條、高楠兩博士列席せられぬ、乃ち斯篇の著ある以以也。本書の梗概を舉くれば左の如し。

先つ始めに佛國の南清經營を說いて、我が得たる南方美麗の新領土は未だ佛國の膽力を感ずるの神經を有せずと雖、少なくとも英國が零丁洋の主權者として拂ふだけの注意は我國民に向て望むとて、大に國民を警覺せられたり、二章には地誌に關して詳細に之を述べ從來の誤謬を訂正する等頗る周到を極む、以下南征記安南行、安南史詩は一部の風土記として見るべく、古今の盛衰史として見るも感々發すべきものあり。猶唐を中心とせる外國の交通の下には鑑眞和尚漂流の海路を示し又南海航海の小傳を敍して、佛教者に取りては頗る興深きを覺ゆ。其外安南漂流海路略說、及び安南の言語文學等に就て記されたり、凡て兩博士の實地親しく踏査して疑ほしきを正たし、詳ならざる處を探り、以て參考としたるを以て、風俗、人情、宗教歷々指點するが如し。彼の机上の空論と固より同一視すべきにあらず。邦人由來此等の著書尠なし、吾人は兩博士に向て其効を多とし且つ其勞を謝せんとするもの也。本書挿むるに寫眞版十數葉を以てせり、就中廣東華林寺五百羅漢の圖の如きは甚だ珍とするに足る（定價九十錢）

◎東京　第三號　日本橋　東京雜誌社

巻頭に文久三年榎本武揚氏がロンドンに於て撮影したるものを掲く、東京と銘打たる以上は首府らしく今少し品あらまほしく望むもの也。（十錢）

菅沼覺圓著

◎信仰活談　京都　法藏館

青年の爲めに信仰を說かれたるもの、亦以て修養の糧となすべき也。（十錢）

小波編

◎三筋の金髮　京博文館

世界お伽噺の第五十一編として、例の輕妙なる筆もてさら〳〵と面白く書き下したるもの、今其筋書を左に少しく紹介せんに、或けちな國王ありて一日山に狩に出てゝ路に迷ひ、炭小屋に至りて黑男に過ひて案内を賴みしに、其男は自分の妻が今夜出産するを以て斷ほり、其代り明朝案内すべき事を約して其夜は遂に小屋に泊りぬ、其夜果して出産ありし、然るに其夜女の嬰さを耳にせり、それはこの子は一たび災難にかゝるけれども後には屹度此國の王になるべしとのことなりき王は非常に驚き計略を以て其子を殺さんと考へ、男に向ふて汝は活計に窮すべし、余は其子を引き取りて養ふべき事を約し、城に歸るや家來を遣はして途中之を川中へ流すべきことを命せり、其後二十餘年も過きて王は又漁師の家に立派なる若者を見て直に素性をきゝしに始めて自分が川中へ流して殺さんとしたる子でありしことを發見し、再び之れを殺さんと思ひ急き若者を城中に遣はし臣下に命じて之か謀らしめんとしたるも、事齟齬して成らず、遂に難題を設けて目の神の計に金の髮三筋を待ち歸らば王子となすべき事を以てせり、遂に若者は便を果して金髮を持ち歸るのみならず、色々の寶物を齎らし來るを見て、餘儀なく王位を讓り、王は忽ち慾望を起して自身に寶のある所に行かんとして遂に途中に鴉を買ふと云ふ、勸善懲惡主義の筋書也、なか〳〵卷を捨てかたき心地する也、最も面白く感じたるは黑い湖水の船頭が問ひに對して目の神の答へたる事なり、左に一句を掲載せん哉『彼奴ですか！それは譯ありません、今に彼奴より罪の深い奴があの湖水を渡りに來たら、其奴を船に乘せた所て、急いで自分だけ蹤を上るのです、そうすれやアうの者が、今度は湖水の船頭に成つて、生涯舟を出られなく成りますのさ』云々。（定價一册七錢）

報道一束

◎霜降らむとして雁、鳴き過くるの邊、秋蘭々の感に不堪候。殘燈を剪りて靜に會心の書を讀む、何物か心裡に響を與へ候心地致候。

◎近頃に至りて著るしく目に觸るゝものは、佛教の傳道の旺んなる事に候。土曜講演もあり、宗教研究會もあり、青年傳道會もあり、其他何々婦人會等日としてこれあらざるはなく候。教界の爲め洵に賀すべき事と存候。四五年前に比すれば、東都教界の氣運一變したるの傾有之候。希くは此氣運をして永久に持續致度ものに候。

◎教界の出來事として稍〻注目すべきは、西本願寺學制改革問題に候。今其要旨を記さんに、一派の教育機關を大學林中學寮とし、大學林は本山之を設け、中學寮は地方樞要の地に置かしめ、兩覺共に宗教の專門研究と爲し、宗教以外の普通教育は凡て世間の學校に讓り。而して大學林の更改は明年四月より、實施し、中學寮の更改は卅八年四月以後に實施すと云ふ事にて、教學參議會に於て原案通り可決され候。此案は再び末寺會議によりて通過の如何によりて運命の定まる所に候。

若し此案にして通過せんか、高輪佛教大學を廢して、單に東京分教場として京都專門大學の附屬となるべしとの事に候。

抑々這回學制更改は正しく法主の意志にして、英國にて實見せし講座組織の制度其まゝを應用せんとしたると云へる口實の下に舊思想の當局者が漸く盛ならむとする新教育を蹂躪する目的にて計畫したるものゝ由に候。吾人は最も進歩的思想を稱せらるゝ同法主が此の如き考ひありとは信じ申さず候。

◎右學制更改問題に就ては、高輪大學の職員一統は、大に激昂し、教學私見を草して、法主に建白し、且つ當局者に送りて大に反省を促したるを以て、當局者の怨を買ひ去月譴責を受けたる由に候。尙高輪大學生も檄を飛ばして有志者に警

告を與へ候。今後如何に成り行き候べきや。

◎右の學制改革に反對の有志者によりて、新に「敎海時事」と題する雜誌を發行すべしとの事に候。

◎巢鴨村に新築せられたる眞宗東京中學校は、本月一日賑々敷移轉式を擧行せられ候。京都よりは大谷派新法主の代理として、慧日院御蓮枝臨席せられ、新法主の親示を朗讀し、次に梅原敎學部長の式辭あり、次て菊池前文相幷に前田博士の演說あり、吉田學長の答辭にて式を了へ候。當日は雨天にして遠路にも拘らず、來賓も多く有之候。午後よりは寄宿舍に於て生徒の催にかゝる餘興等ありてなか〳〵盛會に候。今や巢鴨の地大學既に成り、中學又新に成り、巍然たる兩校舍を見て吾人は頗る意を强うする心地致候。

◎其後の求道學舍日曜講話の演題幷に出席者如左

信仰の門戸(十月十日)　楠　說　造
希望の光明(仝上)　近　角　常　觀
宗教は利劍の如し(十月十八日)　曾　我　量　深
竹林精舍の經營(仝上)　近　角　常　觀
清澤師を偲ふ(十月廿五日)　佳　田　智　見
秋曉の感謂(仝上)　近　角　常　觀
運命論と他力敎(十一月一日)　佐々木月樵
內的實驗より見たる頼敎(仝上)　近　角　常　觀

先月の最終の日曜日即ち廿五日に於て、例の如く信仰談話會を始め候、出席者八十名餘りにして、室を取り廣けたるにもかゝはらず、尙狹まく感せられ候。思ひ〳〵に實驗の信仰談をなして散會せられ候。

◎村上博士、村上文學士、和田學士三氏發起となり、這回新に佛敎主義の女學校設立の計畫の由、すでに其趣意發表致され候。東洋女學校の名稱はそれに候。資金募集額は拾五萬の由。吾人は一日も早く設立せられんことを希望いたし候。

◎大谷會は本月二日富士見軒に於て開かれ候。井上博士の印度旅行談は面白く感ぜられ候。秦學士渡米の經驗談は頗る有益に有之候。出席者五十餘名

◎此度近角學士は信仰問題と題して重に信仰に關する論文を集めて文明堂より出版するとに相成候。是同氏が歸朝後一年有餘の所感は悉く此編に收め候。されば內的實驗より迸り出たる信念の告白もあり、現時の敎界經營に關する眞摯なる論議もあり、一たび本書を繙かば親しく同氏に接し講話を聽くの思ひ有之候。尙佛弟子小傳も不遠文明堂より出版可致候。

◎求道學舍の土曜會は先月九日と廿四日の夕方より開き申候、前會には松本博士出席せられ自信に就て所感を述べられ後の會には文學士吉田靜致荻野學士兩氏出席せられ候。吉田氏は英國の氣風を語られ候、何れも歡談笑語興を盡くして散會致候。

◎基督敎の青年會側にては、外國傳道會社より寄附を受くべきか否やの問題起りつゝあるやに聞き及候。基督敎徒も多少活氣を添え來りたりと可申乎。

◎秋も暮れなむとして日露の雲行更に晴雨を卜し難く候。

◎昨今は雨蕭々として庭の垣根いたくあれ、黃菊、白菊の打萎れたるいとあはれに候。たゞ紅葉の稍々色つきたる風情愛らしく候。

◎げに秋の空ほど眺め淸きはなかるべく候。されど曉の雲は冷かにして、楢の風は身に泌む思ひ有之候。いざ道友諸兄

懈れる心に鞭うつて向上の一路に進まむかな。　早々

月の初六

獨逸より

常觀兄、兄は予が西洋の地に入りて如何なる觀察を下し又感を惹起したりと考へ玉ふか、

余は日本要路の人に一度歐洲の地を踏まむことを勸めたし、そは歐洲の美を做はむが爲めにあらず、又深く西洋文明の源を探るにも及ばず、唯日本が如何に美しく如何に貴きかを知らむが爲め、日本が如何に天惠の豊かなるかを自覺し此を保存し之を持續せむことを希望せんが爲なり。

日本人は此自覺なきが爲めにいたつらに西洋を羨み、且つ崇拜するものなり。日本人は金持の放蕩息子の如し、遊惰にして徒らに天然物を消却し去つて顧みず遊んで居つて食へるものと心得るなるなり。尙金持の息子が金は泉の如く地から湧いて來るものかと思ふに似たり、天惠の大なる國却て禍なる哉、埃及の地印度の地何れか天惠に富まざりし。英耶の銀も用在其人と京都の詩人が歌ひしこと思ひ出るゝや。

西洋人は誠に不幸の國に生れたり、彼等尙貧家の兒の如くなり、忍耐刻苦奮勵せし結果彼等は今日の境に至りしものなり、彼等は河か溝渠となし。日光を製造せむとする民なり。而してうれを成功する民なり。彼等は天然物の上に必ず人工的の一物を加へざれば止まざる民なり。彼等は依賴心の少き民なり、獨立自尊心の强き民なり。

日本の同胞今如何、彼等甚だ依賴心に富む、自尊心よわく守るべき所を守らず朝三暮四、甚だ不安定の有樣なり。彼等は天の恩惠を無みするものなり。彼等は一種謂ふべからざる趣味に富む美術を有す、彼等は月夕溜の梅、吉野嵐山の櫻を有す、又彼等は月を愛すが如き初瀨、龍田の紅葉を有す、又彼等は鎌倉、誠實の美風を有す、彼等は錦を曝すが如き初瀨、龍田の紅葉を有す、又彼等は鎌倉、誠實の美風を有す

關係を萬世一系の皇室に有す。しかも彼等は永世分離せむとしてもしがたき臣民の關係を萬世一系の皇室に有す。此等の一を雖も此を世界の何れの地に求めうべきや。彼等はしかも未た自覺せざるなり徒らに他を羨んで天の與へし美しき貴き所をも此を捨て去らむとす、斯民如何にして國を興しうへきぞ。

兄よ埃及は天文數學をうみ、亞剌比亞も亦算數を生みき、「パレスチナ」は耶蘇敎を生み、印度は佛敎と美術とを生みき。しかも此等の諸國は如何、彼等は英雄を生みし名もなき母の如く忽潰として消えて跡なし。されど耶蘇敎は西に向つて佛敎は東に向つて根ふかく弘まれり、そは消えず失せず。算數美術も東と西とに傳りて人の命の限り失へしとも覺へず、是等の諸國は實に生母なりき、されど其兒を搖籃の中に育て上げたる迄にして早く逝けり、未た之を成人に迄敎育するに至らざりき。眠ある歷史家は是等の滅國を文明の生母として尊敬するに留らむ。日本、我等の祖國たる日本も亦、此を以て滿足しなはるべきか。

世界人類の根を絕たずば地球の何れの隅にか日本の特所を保續し之を發揮する民はあらむ、若し日本の特所が値あるものならば、今日の日本國民は之を他の有爲なる人種に讓つて終るべきか。兄これ疑問にあらずや。

日本國民は其特所を發揮せしめうの兒を成人に至らしむる迄敎育する資力なき民か、之を他の養子として一任すべき民か、予は決してしか信ぜざるなり。必ず自ら養育し、自ら敎育し、之を世界に及ぼして其影響を地球の上に及ぼす資格あり、位置に立てる國民と信ずるなり。兄よ今時歐洲の形勢を知り至ふか「バルカン」半島は騷擾たえず。墺太利は匈牙利（此は蒙古人種なり獨逸人種なり、日本人の墓ふべき人種なり）獨立せんとし（ベーメン）又起むとす、此國の分列は歐洲の權力の平均に少なからざる影響あるべし、魯國にも必ず事多かる時ならむ。英國は愛蘭土の所置に苦み獨逸帝國は聯邦皆「プロイセン」の專橫を苦む、永き平和はなかるべし。歐洲の地に一大變動の起ることは遠き將來にはあらざるべし。

東洋は如何、支那彼の如く「シヤム」朝鮮言ふに忍びず。日本にして若し自立を失はば天の與へし東洋の特所は如何にして之を保續し、發揮しゆくべき。日本の國民決して若隱居すべき時期にあらざるなり。しかるに彼等の行ふ所、行はむとする所を見るに恰かも捨兒して他人の子を養ほむとするが如き狀態にあり。今の間に國民自覺して刻苦奮勵せざれば悔ゆるも及ばざる時代の來らむこと必せり。

兄よ、兄は國民の指導者なり、精神界の王者なり、予の云ふ所眞理あらば之を同胞の耳に傳へよ、日本は最も警戒を要する時代なりと信ず晉見如何となす。

獨逸「フライブルヒ」にて

小弟猪之吉

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして、志操清淨なるものは、其想理を實現、せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也

昨年已來、聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引き繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め。また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に從ひしが。幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とにより て其期する所空しからず。學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き。假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す幸に篤厚なる先輩の指導に從ひ、忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行によりて漸次其結果を擧けむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛敎徒に屬する會館の設なく、其不便を感する事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未た容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期ずればなり、故に先づ現時の必要に應すべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初めとして、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過くるなし。冀くば四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹で白す。

明治三十六年十月

贊助者（いろは順）

理學士　稻葉昌丸
理學士　池山榮吉
理學士　今川甚神
理學士　石川成章
理學士　板橋盛俊
淺草銀行頭取　今井喜八
文學士　西澤善七
文學士　本多辰次郎
文學士　朝永三十郎
文學士　常盤大定
文學士　大内青巒
監獄事務官　大草慧實
文學士　小河滋次郎
文學士　萩野仲三郎
文學士　岡田治衛
文學士　和田武鼎
醫學博士　片山國嘉
文學士　柏原文太郎
文學士　吉田賢龍
文學博士　田靜致
文學博士　高楠順次郎
文學博士　月見覺了
文學博士　南條文雄
文學博士　村上專精
文學士　杉文秀
法學士　野田藤馬
侯爵　我通久
文學博士　田慧雲
文學博士　松本文三郎
文學博士　岡湛海
文學士　丸井圭治郎
文學士　藤島了穩
文學士　藤井健治郎
文學博士　姉崎正治
養育院幹事　安達憲忠
秋野孝道
普通學務局長　澤柳政太郎
文學士　齋藤唯信
文學士　佐竹觀海
文學士　酒生慧眼
境野哲
文學士　櫻井義肇
文學士　三好愛吉
文學博士　白鳥庫吉
島地默雷
島田蕃根
文學士　新保德壽
杉村廣太郎

發起者

近角常觀

日曜講話

毎月日曜午前九時より開く

求道學舍

本郷森川一

注意

一、喜捨金爲替振局は本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛若くは第一銀行宛御取組み奉願候
一、爲替受取人宛名は東京本郷區森川町一番地求道學舍近角常觀宛にて御送附奉願候
一、喜捨金御送附被下候節は直ちに發起人より受取差出し月々政教時報紙上に於て報告可仕候
一、喜捨金は直ちに第一銀行預け込み可申候

求道會館設立喜捨受領報告

一向二年間禁烟の金額　越後長岡町越佐新聞社　矢部謙次郎殿
一金貳拾圓也（即納）越後水原町　同志青年會殿
一金參拾圓也（即納）越後長岡町　佛教婦人會殿
一金壹百圓也（即納）　野本恭八郎殿
　　無名氏殿
一金五圓也（即納）加賀何某殿
一金貳圓也（一圓納附）越中五福村　田村直喜殿
一金五圓也（一圓納附）越中滑川　藤谷惠壽美殿
一金壹圓也（即納）
一金貳圓也（當分の寄附として納附）靜岡　有志殿
一金貳圓也（全上）越後長岡在　宮原青年會殿
一金貳圓也（全上）東京　板橋盛俊殿
一金五圓也（即納）越後與板村　大橋小左衛門殿
一金壹圓也（即納）農科大學教授　高橋偵造殿
一金壹圓也（即納）早稲田大學生　藤井文祐殿
一金五圓也（即納）越後長岡　近藤九滿治殿
一金壹圓也（當分の寄附として）靜岡　熊田子之四郎殿
一金五拾錢也（全上）靜岡　佐藤朝暾殿
一金貳圓也（全上）靜岡師範學校教授　尾崎元太四郎殿
一金貳圓也（全上）眞宗東京中學教授　千野哲次殿
一金參拾圓也　高等師範學校教授　和田鼎殿
一金壹百圓也　吉田靜致殿

合計金參百拾六圓五拾錢也

右求道會館設立資金として御喜捨被成下茲に謹むて感謝し奉り候也

發起人　近角常觀

文學士近角常觀先生著

信仰問題

近刊

菊版二百頁以上
洋裝總クロース製本美麗
代價一冊六拾錢郵稅拾錢

如何にして信仰を得可きかとは、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すべきかとは二十世紀の問題也、本書内篇は前の疑問に答へたるもの也。内篇には内的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理、等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を叙するに至りて慈光春風の世界に遊びて攝取の清懷に悟融するの想あらしむ。

外篇は社會の病源に向て根本的の救濟を施こし、理想の淨國を現世に實現せんとする者、歐米各國の宗教界及ひ社會事業を紹介し、翻て佛教原初の眞精神を說き、將來、清新にして且つ健全なる社會的經營を鼓舞し來る、繙く者をして感激奮起せしむるものあり。

本書卷首に米國シカゴ青年會館、英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖書飜譯室、佛國宗教歷史大會の寫眞石版圖を揭け、附錄として著者洋行中の通信及ひ旅行記を收む、趣味津々聊か讀者を慰むるに足らむか。

發行所　東京本郷四丁目　文明堂

梵文學十二原書出版豫告

今般梵書中必要の原本十二種を選び金屬版に依り出版致候

宗學校及圖書館等には一本を備へられ、且つ**梵語教科書**として用ゐられん

宗教、哲學、文學、その他に就き最も簡易にして必要なるものを撰び申候

◎第一編として

文學博士 高楠順次郎先生序文

高楠兩博士の希望により特に**原價**を以て配布致候間**各出版**の**原書**は

ことを希望致し候

一梵語脚本シャクンタラ

詩聖カーリダーサの作にして、獨のゲーテ、ヘルデル、等の人物に依りて歐洲に吹聽せられたる

地間美の極と賞讃せり **獨逸ブルガルド版**により梵字を以て印刷致し候

有名の脚本なり、ゲーテはその自作の詩『天「シャクンタラ」に於て之を

洋裝菊版二百十二頁餘 クロース紙質印刷精撰

原價金貳圓郵税金拾貳錢

（製本既成）

文學博士 前田慧雲師新著

大乘佛教史論

▲菊版二百三十頁
▲上製價九十錢税十錢
▲並製價七十錢税十錢

內容は世既に定評あり。初版再版月餘にして賣切となり、第三版漸く出來。

發行所 東京本郷四丁目 文明堂

佐々木月樵先生新著

實驗の宗教

▲本日發行
▲菊版三百二十頁
▲洋裝クロース美本
▲定價五十五錢税十錢

宇宙の大靈、宗教的偉人の人格となつて世に顯はる、天の紅霓の如くそれ美也。我等此美に接して大靈の懷に入る。快何ぞ極まらんや。

人格の感化は、大靈の活ける攝取也。著者自己心中の煩悶を醫し大安住の地を得んとして焦慮すること多年、時に傳教に行き弘法に行き、源信に行き、妙惠に行き、道元に行き、法然に行き、日蓮に行き、親鸞に行き、蓮如に行き、白隱に行き各々其異なれる人格の上に光れる宇宙の靈氣に接し、こゝに自己の信念なるものを得たり。宗教の確立を見るに至れり」以て本書の內容を知るべし

注意

一たび本書の發刊を豫告するや、江湖の要求甚だ多く、僅々數十日にして其申込數四百二十七册の多きに達したり徒誌の切抜を蒐めたるものと同視するなかれらに此頃續出する雜

文學博士 松本文三郎先生著

佛教史論 第一編

佛典結集

海老名彈正先生著

基督之大訓註釋

▲上製價八十錢税十錢
▲並製價六十錢税八錢

○最新刊十一月五日發賣
○洋裝クロース上製
○定價金五十五錢郵税十錢

發行所 東京本郷四丁目五番地 文明堂

東洋女學校創立趣意書

教育の得失は實に是れ人生の一大事なり、一身の成敗、一家の盛衰、社會の安危、國家の治亂、皆唯之に職由せざるは無し、其事の成し易きに似て、其の功の全うし難き、復た之に過ぎたるは無し然り而して女子教育を以て、尤も難中の難と爲す。

謹て勅語を按ずるに、學を修め業を習ひ、智能を啓發し德器を成就すと、之を教育の四大要點と爲す、靴近三十餘年、國運頻りに歩を進め、教育の事亦た頗る隆盛に屬し、其の謂ゆる學を修め智能を啓發するが如きは誠に大に見る可き者ありと雖も、其の業を習ひ德器を成就するに至りては、未だ曾つて其の甚だ可なるを見ず人皆以て憾と爲すや尚し。

夫れ學と云ひ智と云ふ、是れ世界に共通して人類の具有する所、固より東西古今を問ふの要なし、但其の業と云ひ德と云ふに至りては、國土の情態に隨ひ、民人の習慣に因り、必ずしも一模に範出すること能はず、是に於て近時頻りに實業教育を唱導して、以て國土に適當せる業務を授けんと欲するの擧多きを見る、蓋し社會の一大慶幸なり、然れども其の德器を成就するの道に至りては、未だ曾つて能く其の民人の習慣に順應して過慣なきの擧あるを聞かず。

夫れ我國古來の德教たる、普ねく感化を及ぼせる者を求むれば、其れ唯佛教の一途あるのみ、而して其の化の及ぶ所、貴賤上下に通じて、普ねく感化を及ぼせる者を求むれば、是を以て苟くも之に據て之を導くときは、俗を遺傳の久き浸染の深き、其の勢力牢乎拔く可からざる者あり、是を以て苟くも之に據て之を導くときは、俗を易へ風を移すも亦た甚だ難しと爲さず、是れ固より男女を論ぜずと雖も、女子に於て尤も更に其の然るを見る、然れども現今佛教各宗の情態たる、久しく眞諦に偏倚して俗諦に疎濶なりしを以て、未だ遽かに其要求に應ずること能はざる者に似たり、是に於て世或は儒教を主とし、或は基教に資て、以て之が教養を爲す者ありと雖も、概ね舊陋に泥まざれば、感化益々深くして動靜益々家庭に軒輊するが如き者あるに至る、人生の一大恨事、豈復た社會に逕庭し、新奇を衒ひ、遂に國情民俗に契當すること能はず、其の甚しきは知識愈々進みて言行愈々過ぐる者あらんや。

我等自ら揣らず此の闕典を補充せんが爲めに、茲に東洋女學校を創立し、其の智能は尤も社會に切實なる常識の發達を主とし、其の德器は尤も家庭に順應せる精神の化育を要し、新奇を衒はず、舊陋に泥まず、智德相資けて、以て健全なる淑女を陶冶するのみ、一大鑪鞴と爲さんと欲す、蓋し是れ至難中の至難なり、唯我等身心を料撥して、事に此に從はんと欲するのみ、蓋し江湖有道の志士仁人、我等の微衷を照鑑して、扶掖推挽の贊助を吝む無く、速かに其の功を奏せしめたまはゞ、豈啻我等の慶幸のみならんや。

創立發起人　伯爵　井上哲次郎　渡邊國武　大隈重信　梅渓通虎　山本權兵衛　子爵　井上馨　子爵　大山巌　子爵　佐佐木高行　子爵　清水谷實英　子爵　田中光顯　子爵　方保田宗城　子爵　鎮西忠善　子爵　大江卓　子爵　歌門義猷

創立贊助員　専精（いろは順）

菅原道眞　下田歌子　酒井良清　安藤謙次郎　上田萬年　高橋健三　河瀬秀治　岡田良平　井上圓了

男爵　島地默雷　菊池大麓　前田慧雲　黑田清隆　高崎五六　片山東熊　大内青巒　江木千之　磯貝浩　潤一郎　早川千吉郎　元良勇次郎　三浦參次郎　麻生慈眼　山川健次郎　上田萬年　辻新次　何禮之　織田信恵　雪嶺生　嚴本善邦　森有禮　篠原陵三　澤柳政太郎　山縣有朋　南條文雄　高田早苗　大隈重信　林董　大草慧　明石照男

創立發起人　村上專精　和田鼎　村上龍英

清澤滿之君奬學資金募集

物質的文明の潮流激甚なる間に於て敢て身を宗教界に投して國民の精神的感化に從事せられたるもの吾輩故清澤滿之君に於てこれを見る君が明治二十年文科大學を卒業せられてより宗教界に貢献せられたる所の少からざるは更に多言を要せず若し向後なほ數年の間君か英邁非凡の資と多年修養の功とを以て世の青年を指導せられたらんには能く物質的偏傾の弊を矯むることを得たらん然るに君が學德益す老熟の境に進みて君の感化愈々大ならんとするの際忽然として逝かれたるは啻に君の爲に哀むのみならず亦實に我社會の爲に遺憾とする所なり乃ち茲に清澤奬學資金を募集し之を分て東京帝國大學と眞宗大學とに寄附し今後宗教學を專攻せんとする學生の學資に充て以て聊か君が永久の紀念に供せんとす謹みて同感諸君の賛同を希望す

御出金及其御申込は東京小石川區表町澤柳政太郎東京巢鴨眞宗大學南條文雄の内一名にあて便宜御送付下されたく郵便爲替は小石川郵便電信局拂に願ひ候御申込期限は本年中と致候

明治三十六年七月

發起人　一木喜德郎　今川慰神　早川千吉郎　常觀　大草慧實　岡田良平　南條文雄　和田圓什　梅原讓　村上專精　澤柳政太郎　稲葉昌丸　吉田賢龍　上田萬年

右の趣旨に基き同師の感化を享け若くは德澤を慕ふの人々は冀は賛同の意を表し玉はむことを猶便宜上本會宛御送金被下候へは取次可致候

大日本佛教徒同盟會

規定

一、本誌は毎月一回（八日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
　但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

明治三十六年十一月七日印刷
明治三十六年十一月八日發行

發行兼編輯人　百目木智璉
印刷人　白土幸力
東京市本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部（電話下谷二四三二）
大賣捌所　東京市神田神保町　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂

前號要目

勞働組合の發達　池山榮吉
教界振張策　故藤井學士
求道學舍設立の趣意を披瀝す　近角學士
新聞記者論　一新聞記者
五十年の我等　劍虹生

政教時報第百六號
明治三十一年十二月廿六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十六年十一月八日發行（毎月一回八日發行）
（東京市神田區美土代町二丁目三光堂製版印刷